国語法

文法の原理

小林英夫

國語科學講座

— VI —

國語法

文法の原理

小林英夫

株式會社

明治書院

國語科學講座

—VI—

國語法

文法の原理

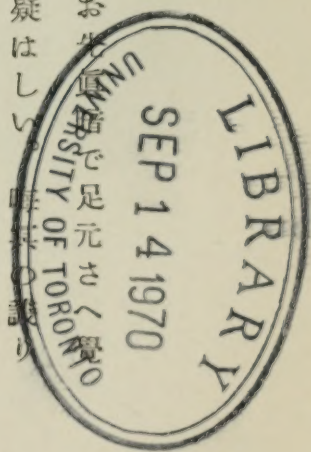
小林英夫

株式會社

明治書院

およその見當をつけて掘つていくのである。お先眞暗で足元さへ覺束ない。陽の目を見る處までいけるかどうか疑はしい。唯其の譏りは覺悟しなければ。明白を求める士は地表を眺めてゐればよい。幽境に遊ばんと思ふ者のみ私共の伴侶とならう。或る日

體系的でない——誠に本篇の弱味である。もろもろの矛盾を敢へて調和させようとはしなかつた。なまなましい考察だけが今の私には貴かつたので。次の或る日

一九三四年、京城の春の

文法の原理

小林英夫

一　言の論理

貴方といふものは私にとつてどういふ存在であるかといふと、言ふ迄もなく私の意志の自由になつてほしい存在である。貴方は常に私の意欲の對象としてのみ私の關心域に這入つて來るのである。貴方は私の「言ふことを聽」いてほしいのである。私の「言ふことを聽く」ためには、私の「言ふことが分」らなければならない。私の言ふことが分ることを豫定して、私は貴方にものを言ふのである。私の目的は貴方を私の意志の支配下に置かうとするにある。貴方は私の行動の對象である。要はこの目的を達することであるが、それには手段が必要である。この手段として言語が發明された。この目的のためにのみ言語が役立つものであるかどうかは、俄かには答へられないが、言語の最大の役割が理解手段であることは動かせない。

私の言ふことは外面的には音聲の連鎖を成してゐる。この連鎖と全く同じものは、貴方は生涯に一度も產出又は印象したことはないに相違ない。しかも私の言ふことが分るといふのはなぜであるか。それは貴方が既に私の產出した

音聲連鎖を部分に分つべき尺度を有つてゐるからでなければならない。この尺度によつて量られるものは個々の體驗事實である。個々の體驗事實は私のものと貴方のものと相違しはするが、同じ範疇に屬するものとして量られる。このやうにして私の言は貴方によつて語に分たれる。この作用が卽ち分節である。だからして分節作用は本來聽手に於て營まれるものである。さて貴方は私の言を分節しただけでは未だ私の言は分つたとはいへないのである。貴方は更に、分たれたるその部分からして全一體を再び綜合しなければならない。その際綜合の材料となるものは、先に分割・類別したところの範疇的なるものではない。同じ範疇に屬するところの貴方自らの體驗事實である。體驗とは、生きたそして生きてゐるといふことである。心理的に見れば、記憶となつて腦裡に宿つてゐるものである。それらを材料として貴方は、私が始め設けたところの結合の順序に從つて、私が言つたことを再構するのである。かくして再構されたものを全體として貴方が追體驗するときに、貴方は私を理解したといふことが出來るのである。貴方の部分的體驗事實については私は何等知るところがない。全體的體驗は、正にこれから貴方がそれをなすことを私が望むところのものである。それは私の希望であつて、知識ではない。從つて私は貴方についてはピンからキリまで何も知らないのである。しかも貴方が私を理解することを豫想してゐる。

言の本質は分解・再構性にある。ギリシヤ人がロゴスを言と見ると同時に判斷と看做した理由もそこにある。ロゴスは動詞レゲインに對する名詞である。吾言ふ、君言ふ、彼言ふでなくて、言ふこととそれがロゴスである。ロゴスは言の普遍的樣相でなくてはならない。言の普遍的樣相を考察するところの學問が文法である。それゆゑ文法の概念の內には、言と、普遍的樣相と、學問との三個の概念が含まれてゐる。いまこれを順次に考へて行かうと思ふ。

言とは何であるか。それは言語を以ての體驗の自覺的表出である。いま私は貴方にどこそこへ使に行つて貰ひたいといふ欲望を有つてゐる。これは私のうちに生きてゐるところの體驗である。私の欲望が飽和點即ち行動點に達するときには、私はもはやこの體驗をそのまゝうちにひそめておくことが出來なくなる。その瞬間に私はこの氣持を「口に出す」。これが體驗の表出である。この表出はなぜ自覺的でなければならないか。それは、效果を狙つてゐるからである。勿論あな悲しやといふやうな、反射的に「口を突いて出る」言もなくはない。しかし若しそれが相手の同情を得ることを目的とするものではなくして、單に自己表出によつて自己を慰めようとするものであるならば、敢へて整つた言語を以てする必要はなく、單に雜音を發するだけでも濟ませるであらう。それゆゑ自覺的とは效果を狙つたといふ意味である。有意的だと言直してもいゝ。

この有意的表出は言語を介して行はれる。それでは言語とは何であるか。言ふこと、それが即ち言語ではないか。言ふこと以外に言語なるものがあるであらうか。あると考へる。私がいま貴方に、今日町へ買物に行つて下さいませんかと言ふとすれば、この行爲は確かに私の言である。けれどもこの行爲が可能なるがためには、私の腦裡に、今日なり町なり買物なり行くなり下さいなりの語が豫め蓄積されてゐなければならない。それと同時に、それらの語を一定の順に從つて結合する習慣もまた附いてゐなければならない。語とそれの習慣的結合樣式とが言語の本體である。言語は潛在せる言であり、言は言語の實現である。兩者は連帶的ではあるが同じものではない。さて潛在的なるものはその數に於て有限であるがその質に於て無限である。例へば町を指すべき語としては私は町といふ語一つしか知らないが、如何なる町を指すかは豫め決定されてゐない。私がいま貴方に向つて町へ行つて下さいと言つた瞬間に、町

の意味は決定されて來る。無限者が限定されるのである。西田幾多郎博士の言葉を借用すれば、言とは「非限定の限定」である。「現實に有るものは自己自身を表現すると共に事實的に自己自身を限定するものでなければならない。一般的に自己自身を限定すると共に個物的に自己自身を限定するものでなければならない。事實的に自己自身を限定する所に、作用とか個物とかいふものが考へられるのである。……表現的なるものはロゴス的といふことが出來る。」（現實の世界の論理的構造、思想一四〇號三頁）。これを言換へれば、言は個別的である。個別的なるものが他者に理解されんがためには、一般的なるものゝ存在が豫定されなければならない。言は言語の實現であつて始めて理解されるのである。もう一度言換へれば、言は話手にとつては表出の形式であり、聽手にとつては表出内容を引出すべききつかけ若しくは刺戟である。言が或るものではなくて、言語を實現することであるとすれば、文法學の對象はこれの實現の手順でなければならない。

言語は言にとつては、形式に對する素材の役を務めてゐる。形式は個別的であつて、おの／＼がおの／＼と相違してゐる。おの／＼の形式が他から獨立してゐる。一の形式は他の形式を以ては置換され得ないところにそれの個有の價値がある。言の個有價値を稱して文體といふ。しかしながら文法學の對象はこれではない。文法學の對象はむしろ、無數の形式の間にある公約數である。抽象的・普遍的なる類型である。文體に自由性があるとすれば、文法には拘束性がある。この拘束性は何に由來するかといへば、それは直接には人間の理性であるが、間接には人間の一定集團即ち特定の社會である。純粹論理が前者によつてのみ規定されてゐるに對して文法は後者によつても規定されてゐるといふことのうちに、兩者の違ひがある。文法は社會的論理である。オルガノンのオルガノンである。

若し論理といふものを形式論理、いな正當にはむしろ形式主義的論理とのみ思ひなすならば、文法範疇は論理範疇とは同じでないことは明かである。けれどももう少し廣い意味で、凡そ二個の主體が互に他を理解することが出來るために豫め與へられた思惟形式であると解するならば、文法範疇は卽ち論理範疇であるといはざるを得ない。後に說く如き文法學的方法によつて或る數の文法範疇が見出されたとしたならば、それは何を意味するか。それは言が理解されんがための論理以外ではあり得ない。言のアンテグラルな特質が、相互に矛盾的なる自由性と拘束性とであるならば、言の論理とは、前者を排除したる後者である。拘束なき自由が抽象である如く、自由なき拘束もまた抽象である。例へばこゝに格といふ現象がある。これはバイイ(Charles Bally)のいはゆる外附の關係(參照本文第七章)の一つであつて、互に外部的なる二辭項を新たに結合するものである(一般言語學五〇節)。關係は二つの辭項がなくしては成立しない。しかし辭項は一つの關係がなくしては成立しない(西田前揭論文五)。それゆゑ辭項と關係とは不可分離のものである。さてこの辭項從つて關係は、個物それ自體ではなくして、個物のいはゞ上にある無形の實體であるからして、抽象的である。故に格といふ文法的現象は抽象的實體であり、このことは又、文法的現象一般についてもいひ得るのである。

こゝに一言注意を要することがある。それは、言の本質を表出と見ずに、傳達であるとなす見解があるからである。我々の考へによれば、理解といふ作用は話手から何ものかゞ游離して空中を飛翔して行つて聽手の腦髓の中に落ちるといつたやうな作用ではなくして、判斷の形式は話手にあつても聽手にあつても同一であることがアプリオリに豫定されてゐるのである。その形式は心理的には個人の成長と共に出來上るものであるにしても、論理的にはアプリ

オリのものである。だからして言の有意的表出は直ちに聽手に於ける分節・再構即ち理解を意味してゐるのである。それゆゑ言語ではなしに言を定義する以上、敢て傳達を云爲する必要を我々は認めないのである。

　最後の問題は、文法が學であるかどうかを吟味することである。例へば地理といひ物理といひ論理といひ心理といふも、みな理の字を含んでをり、これにわざ〳〵學の字を添へなくとも既に學問を指す慣用がある。それは理の字に既に認識なり學問なりの意が含まれてゐるからである。ところが法律とか生物とかを對象とする學問は、それ〳〵法律學・生物學といふ風にいはなければ、對象と認識とが一致して來ない。文法にあつては、或は對象そのものを指し、或は認識そのものを指す。この曖昧は歐語に於ても同然である以上、因は名稱よりも事柄そのものにあることは明かである。いま例へば子供に向つて生きものとは何かと尋ねるならば、子供は立所にそのものを指差すことが出來よう。ところが文法とは何かと尋ねるならば、彼は面喰はざるを得ないだらう。中學校に入つて英文法なり國文法なりを教はるやうになるまでは、文法の觀念は子供にはないのである。子供は立派に文法に從つて喋つてゐるといふのは言語學者の言種であつて、子供自身はさうした自覺は一向有たないのである。否、我々さへ言語について特別の反省を行ふときならではさうした自覺を有つことは絶對にない。それは生きものが感官によつて知覺される對象であるに對して、文法は肉眼に映ずることのない心の作用であるからである。尤も知識人が始めてその觀念を得るところの文法は、言語學者が看做す如き話手の話し方を規定するところの内なる法則としての心の作用ではなくて、外から彼に命令するところの規範である。それは幾つかの箇條に示すことの出來る規則として書記される。これが知識人の意識に登る文法の最初の姿である。それがためには勿論文法家が既に出てゐたのでなければならない。彼がその文法書を

編述するに至つた動機は多くの場合古典判讀の必要からではあるが、それがやがて當代言語に及んだ。しかしこゝではそのことは不問に附しておいてい〻。とにかく文法なる言葉について直ちに想出されるものは、この規範的な命令的な法典である。文法家は立法家である。この考へは民衆の心に牢乎として巣喰つてゐる。文法はその場合には我々の知識である、法律がさうである如く。知らずしてそれに反するならば何らかの罰を喰はされるやうな知識である。それは知ることによつて始めて在るところの對象であつて、知らぬ前から眼前に横はる對象ではない。このことは話手の話し方を內から規定するところの心の作用としての文法についても同然である。なぜならさうした文法は言語學者がこれを自己に體驗又は追體驗せずしては、彼の認識の對象とはならないからである。文法とは文法意識といふことである。文法は精神である。精神は我々が理解するものであつて、說明するものではない。

そこで文法そのものの名稱と、それを對象とするところの學の名稱とが混用されるに至つた事情も肯かれる。知識はやがて學である。我々が文法を意識したときには、もうそれが知であり、學である、たとへその輪廓は朦朧たるものであつても。たゞ我々は我々の考察の便宜のために、非組織的なる文法意識と、組織的なる文法學とを區別したいまでゝある。その際意識の內容をなすものが規範的なものであるときは、それを對象とする學は規範的文法と名付けてよいかも知れない。しかし前者は通例實用的文法といはれ、後者は科學的文法といはれる。規範的文法意識が如何にして發生したか、それが社會進化に對して如何なる反響を與へるかを問ふのではなくて、たゞ「正しく話し正しく書く」ことを敎へることのみを目的とする故に、前者は敎化的であり、從つて實用的である。從つて學の字を添へては慣用に違犯する。後者にあつては、精神に於ける自然といふことを意味してゐるのであるから、これは自然の意味

を擴大し過ぎることになるので之をやめ、その代りに實用的文法に對比して科學的文法といふのである。科學的文法學といふならば冗語であらう。も一層突きつめてみれば文法學とだけいつてもよいかも知れない。但し私はいま述べたやうな、規範的文法意識の發生並びにそれの社會的影響を論ずるところの學問の存在を認めたい。それは文法意識史である。簡單にいへば文法學史である。否、それの一部であらう。文法そのものに歴史があるかどうかは後に回答する。

或る人は私の意味するところの科學的文法を理論的文法と名付けてゐる。しかしながら實踐を離れての理論は空理である。純粹思惟の形式から文法を編むことは科學的ではない。なぜ科學的でないかといへば、それは文法の本質たる社會的論理とは無關係であることによつて、對象に則しない知識となるからである。但しこゝに實踐といふのは實用とは別物である。完全にして精密なる理論はすべて實踐に於て實現されなければならない。一般的にいへば、實踐に現はれない理論もあり得る。しかしそれは世にいふ假構であつて、科學の對象たり得ないものである。文法の理論は必ずそれが實現されてゐる事例によつて裏打ちされなければならない。記述の體裁上實例を省略するとしても、それはどこまでも便宜上の省略であつて、始めから存在しないのではない。實例の見出されないことを論ずることは絶對に許されない。しかしながら他面に於て、實例はたゞ漠然と集められるものではない。それは特定の觀點に基いて集められるのである。觀點とは何であるか。それは或る目的を志すところの我々認識主體の眼の方向である。いまこゝに一つの現象がある。しかしそれはそのまゝでは未だ星雲の如く渾沌たるものであつて、科學の對象とはならない。それは特定方向からの照明によつて始めて自己の特色を發揮する。非限定が限定されて來る。現象が事實となるので

ある。この事實を理論の實現と見たときに我々は事例と呼ぶ。理論の實現でないものはないと考へるならば、一切の事實は事例である。文法學は事實即ち事例に則した科學でなければならない。故に文法學は實踐的科學である。同時にまた理論的科學である。このやうな二重の稱呼を避けたいなら、むしろ端的に科學的文法といふに如くはない。

これに對する實用的文法の「實用」とは、前に述べた如く教化的といふ意味である。從つてそれは政策的である。或る人が技術と稱する所以である。

二　言の目的

言は言語の實現である。ものでなくてことである。存在でなくて行爲である。實體でなくて機能である。過程でなくて手順である。一連の觀念が如何にして一個の語に結集されるかを論ずるのは言の學即ち文法學の仕事ではない。文法學に於てはさうした「語」は豫め與へられてゐるのである。與へられたものを我々が如何にして實現するかの手順を考究するのが文法學の任務である。

手順とは或る目的を遂行するための手段である。その目的とは私が貴方を私の自由にしたいといふことではない。それは私の生活的目的であつて、言の目的ではない。言の目的は、貴方が私の言ふことを理解することである。今日町へ行つてほしいことを私は貴方に理解して貰はなければならない。買つて來てほしいものは今日要るのである。お隣りから借りて間に合はせることの出來ないものであるから町へ行つて求めなければならない。そこで言は明晰なるを要する。急いで行かねば役に立たなくなる。私は私の要求を出來るだけ早く貴方に知らせたい。そこで言は簡潔な

えを要する。さうは云つても貴方は私の傭人ではない。「早く行つて來い」と言ふわけにはいかない。貴方が私に對して有つ社會的位置を考慮して私は貴方にものを言はなければならない。それで私は相當の敬語を使はなければならない。凡そ敬語は簡潔の反對である。のみならず私は今日貴方が是非行くべきことを强く貴方に印象せしめたい。そのためには勢ひ言の調子を强めるであらう。數學の公式のやうなものは明晰簡潔な言葉で充分であらうが、現實生活の言は複雜な目的を有つ。この目的の多樣性が言の手順を複雜にするのである。文法的現象を眞に說明しようと思ふならば、それを言の目的へと還元しなければならない。なぜなら說明とはものをその原因からして知ることであり、文法的現象のすべての原因は本原的には言の目的の中にあるからである。勿論一の文法的現象が他の文法的現象の原因であることもある。けれどもそれは派生的であつて、本原的ではない。同類項の一が他を規定することは本原的ではあり得ない。

バイイの弟子アンリ・フレエ(Henri Frei)はこのやうにして、現代フランス語の急進的傾向を特色付ける言語的欲求として、同化、明晰、簡潔、不變異、表現性の五つが働いてをることを實證し(誤用の文法)、ブレスラウ大學のハーフェルス教授(Wilhelm Havers)は、直觀性、情緒的表出、力の節約、明晰、美、社會的考慮の六種の努力乃至傾向を選んで、それを印歐語の統辭法に於て例證した(說明的統辭論提要)。もろ〳〵の欲求は互に力學的關係を保つ。一の力が他を凌駕しなければ變動は起らない。言の文法學的說明は、おの〳〵の文法的現象が如何なる欲求に基いて生じたものであるか、その欲求は如何なる力の比を示してゐるかを語ることである。

現象形態の相似性は必ずしもそれの發生の原因たる言語的欲求の同一を意味しない。例へば敬語法なる現象は或る

場合には話手の無知に由來するが（電球の球は個人的無知の結果・酒の肴は集團的忘却）、他の場合には表現を强める手段である（一切がつさい）。だからして分類原理を現象形態の中に置くときは、皮相の意味しか得られないであらう。それでは言語的欲求そのもののみを分類原理として立てるべきであらうか。そのときにはアプリオリスムに陷らざるを得ないであらう。なぜならその欲求はそれのみでは單に潛勢力であつて、それが實現されるときには如何なる形式をとるかは豫斷を許さないからである。

こゝに於て、言の目的が實現されるときの條件を知ることが必要となつて來る。作用因が休憩因と結合して始めて現實が生れるのである。條件は變異的である。おの〳〵の言語に於て多樣である。作用因の種類と數とを同じくしても、條件を異にするときは、別の結果を生む。言語の相異性はこゝに根差すのである。一々の言語に當つて、それの個別的條件を語ることは本講の所攝外である。私は言が展開される形式についての一般的特性を述べるだけで滿足しなければならない。

三　言の展開

言は言語の實現であることは前述の如くであるが、その實現は如何なる形式を以てなされるか。

言の實現形式は展開性である。言ふことは展べることである。記憶として疊まれてゐたものが時間の次元中に於て展開されることである。そこで言は長さを有つて來る。今日町へ行つて下さいといふ意味のことは、語の眞の意味での一刹那に述べることは出來ない。多かれ少なかれ或る長さの時間を必要とするのである。その時間の長短は言の意

味に關係して來る。急速に述べるときと緩漫に述べるときとでは、私の氣持は同一でない。時間的長さが言の意味内容と相伴的變異をなす以上、言の長さは言に内屬せる性質でなければならない。これを人は線條性と呼ぶ。しかしながら言といふものは、一個の意味を有つた一個の記號が順次に鎖の如く一列をなして繼起するものと思ふならば誤りである。記號の多義性はむしろ言語の常態である。一の記號には多くの意味があり、一の意味は多くの記號で表現される。それゆゑに言語に於ける記號は非限定である。この非限定は言の線條的展開のみによつては未だ充分限定されはしない。だからして具體的なる現實界から見るならば、言はむしろ非線條的であるといはなければならない。言のこの性質をバイイは反序性（dystaxie）と名付けてゐる（一二四節）。順序、連鎖に反くからである。現實に於ける言は反序的（dystactique）である。言をひとへに線條的であるとなす誤想は、一つには言の音相については分節しか勘定に入れないやうな速斷のうちに、二つには一時に二語を發することは出來ないといつて線條性を是認するやうな「語」の本性についての既成觀念のうちに、三つには要素を恣意的に分割し、かく分割された塊を一線上に並置するところの文字の幻惑のうちに、その源泉を有する（同節）。例へば貴方今日行つて？と訊くならば、動詞行つてにはイッテといふ分節音連鎖の上に、尻上りの語調が重加されてゐるではないか。これを別の言葉に直すならば、行きますか或は行くつもりですかとなる。かは疑問の助詞である。判斷の對象と價値とがこゝでは別々に表出されてゐる。ところが行つて？では一語が判斷の兩部を兼任してゐる。バイイの用語でいへば累加（cumul）である。行きますかは之に反して解除（décumul）である。言を徹底的に解くことは不可能である。徹底的に解かれた辭項の並置は純粹論理の世界にしかない。現實の言は常に累加的である。しかしながら累加的であることは必ずしも言の線條性を否定するもの

ではない。音相的に見たときの分節そのものが既に時間的繼起に頼つてゐる。のみならず多くの場合、一つの判斷は二辭項の顯在を必要とするからして、言は一辭項から他辭項へと渡らなければならず、かくて線條的にならざるを得ないのである。その含むところのおの〳〵の部分に多義性を許すといふ意味で、言の線條性は相對的線條性であるといへば、誤解を防ぐことが出來よう。

言を構成するおの〳〵の部分が、現實に於て、相對的線條性に關して、より累加的であるか、より解除的であるかを決定することは、文法學の重要な仕事である。例へばフランス語で les feuilles des arbres「木の葉」といふとき、des は所屬を示す前置詞 de と、複數的存在を現示するところの定冠詞 les とを兼任してゐる。單數のときは les feuilles de l'arbre といふことによつて、それが累加的表現であることは明かである。des を de les の收約と見るのは進化に關することであつて、文法が屬する世界たる共時態の關はり知つたことではない。また例へば la plume「ペン」の la にしてもやはり累加的である。なぜならこの冠詞は非限定の陰在的實詞 plume を現示すると同時に、この實詞が女性に屬することを示すからである。

言の一次的展開形式は相對的線條性であるが、それだけでは未だ言は充分自己を個別化することは出來ない。町へ行つて下さいといふ一連の語は、單に時間的に繼起しただけでは抽象である。私が、貴方に、向つて、この言をなして始めて具體化するのである。私とそして貴方は、言が展べられるところの野原である。眼の屆く限りの野原を視野といふならば、言の展べられる限りの野原を言野といふことが出來よう。視野が心理的作用圈である如く、言野は言の作用圈である。普通これを立場といふ。立場は眞空の空間ではない。マイナスではない。それは既に記號學上の積極的意

味を有つてゐるものである。論理的にいへば、判斷の主辭ともなり、賓辭ともなるものである。言は或る場合には判斷の辭項の一を立場に委ねることがある。いはゆる言外の意といふのがそれである。雨、雨！　といふ一つの叫びは立場次第で二樣の意味を有つ。北國の眞冬に降るといへば必ず雪に決まつてゐるのに、今日はどうしたことか、雨が降つて來た。降るのは雪ではなくて雨である。だからしてこの叫びは判斷の賓辭である。立場が主辭の役を負はされてゐる。ところが裏庭に洗濯物が干してある。濡れては困る。急いでとつて來い。といふ命令を含めてゐるのならば、雨、雨！　はこの判斷の主辭である。いづれの場合であれ、雨、雨！なる叫びは立場を背負つてゐる記號である。だからこれを立場的記號と稱してもいゝ。人はこのやうな記號を文であるといふ。文は必ずしも變異動詞の存在を必要としない、單なる一個の名詞でも文であり得るといふ。しかしながら、文なるものを判斷の言語的表出と定義する限り、それは誤りではないにしても不正確な言ひ方といはなければならない。なぜならばそのやうな見方は立場といふものを言語とは無關係のものとなしてゐるからである。ところが我々に從へば、立場は文の構成要素である。言が言であるためには、立場の存在は必須である。逆説的な言ひ方をすれば、立場は無言の言である。特に立場を含めたものと看做したときの言を、ソッスュール（Ferdinand de Saussure）派の人々は langage といふ。私はこれを言語活動と譯すことにしてゐる。だからしてランガージュほど現實的な具體的なものはない。私が上來言といひ、ソッスュールが parole と名付けたものは、未だ充分具體的なものではない。それは單に言語の實現であつて、現實的意味の賦與者たる立場を充分考慮に入れたものではない。言が自己を限定しつくしたときに言語活動になる。ランガージュは凡そ抽象的なものの正反對である。それは餘りに具體的であればこそ、フランス語でもなく日本語でもないのである。

立場は私のみではこれを張ることは出來ない。なぜなら私は私の言の作者であるに過ぎないからである。必ず貴方がゐなければならない。若しくは貴方がたがゐなければならない。但し貴方の肉體は必ずしも必要ではない。精神的な姿で私の心のうちに現はれさへすればい丶。その貴方は立場の資格に於て私の言の規定者である。もう少し適切な言葉でいへば、定位者である。貴方の現前が私の言の展開形式を定位するのである。行かうと言はないで行きませんかと言はせるのは貴方である。貴方が私と共に張る立場である。私と共に立場を張る相手が人物でなくて無形の存在であるときは、それは環境又は情況といはれる。

立場は常に言の相對的線條性のそとにあると限つたものではない。それは言の線條性そのもの丶なかへ織込まれることがある。これが文脈である。本文中に一緒(コン)に織込(テキスト)まれた意である。文脈はどこまでも本文を離れることは出來ず、文脈を有つた本文はそれ自身また新たなる立場に置かれる。たゞ言が文章として書下された場合には、立場が一應游離されることになるから、限定性が減つて非限定性が増して來る。この限定性の減少を補はうとするところに作文上の技巧の一つがある。美學的見地からいふならば、最も大きい幅を有つ言葉を最も的確に定位することが、象徴主義の上乘である。幅のみ大きくして定位が不確かな象徴は、曖昧であつて喚起力に乏しい。よく定位されてはゐるが幅の狹い象徴は、正確ではあるが無味乾燥にして餘韻に乏しい。文脈の活用は文章道の祕訣の一でなければならない。一般的にいふならば、立場的記號に富む言葉は藝術的描寫に適し、すべてを外に顯はさうとする言語は科學的記載に適する。

立場は言を最後的に實現するものである。この性質を私は定位性と名付けたい。定位されたる言は、言語活動であ

る。現實の分析から始めるのを科學的な態度とするならば、我々は先づ言語活動を最先に對象とし、それの概念を分析して言を得、次いで又は同時に、言語を得ようとすべきであつた。我々はこゝでは單に記述の便宜に從つたまでゝある。

言の相對的線條性と定位性とは、言の展開形式のアンテグラルな特質である。文法はこの二つの特質によつて根本的に規定される。

四　言語の單位

言の形式に對してそれの材料となるものは言語である。言は個別であるが言語は一般者である。一般者は非限定である。非限定なるが故に言語はそれ自體として量られる。言換へれば分類原理を有つ。原理は思惟上必然の論理に基くものではない。それは優勢特徴を恣意的に集めたところの集合概念に過ぎないのである。言語を統一するものは、理解性にはない。青森人と鹿兒島人とは互の話がわからない。しかも彼等は同一の言語團體の一員であることを自覺してゐる。それゆゑ言語統一の根據は同一集團たることの歴史的認識にあるものといはなければならない。鹿兒島人が青森人の言葉を聞いて、意味がわからないながらも、一般的立場に於て相手が日本人であることを知るときは、彼の心のうちに言語の統一感が發生する。この感情の連續こそ總體としての言語の統一を支持するものである（參照メイエー史的言語學と一般言語學七七）。

しかしながら言語はあくまでも非限定であり陰在者である。どれが日本語であるかをそれと指すわけにはいかな

い。しかし言語は科學的抽象物ではない。それは話手の集團意識の內容をなすからである。金田一京助先生は言語活動がことであるに對して言語はものであるといはれる(國語音韻論一四)。ものの存在性をレアリテートといふならば、言語はレアリテートである。はつきりと指すことは出來なくともレアリテートたることは否めない。レアリテートたる言語は一方に於て潛勢的、陰在的なるが故に、眞の意味に於けるヸルクリヒカイトではない。現實ではない。働きではない。働くがためのものである。

　言語といふものは記憶の中に存在する。その存在形式は未だ心理學的には充分闡明されてゐるわけではないが、語の集團として蓄積されてゐることは、それの徴標からして推測することが出來る。それでは語とは何であるか。これを定義することは極めて困難である。なぜなら語を具體的に掴むにはそれが實現された姿、卽ち言に於てしなければならない。ところが言に於ける語は既に記憶映像の本質の幾つかを失つてゐる。定位された語は、既に非限定ではない。こゝに語の定義が困難なることの理論的理由がある。實踐的に見るならば、語はその音相によつて、おの〳〵を限定さるべき境界を有たないのが普通である。語の單位性を恣意的に決定することは殆ど全く不可能である(參照ドラクロアー言語活動と思惟二一三、ソッスュールー言語學原論二一一。スミスはこれに反對するが例證が古典語に限られ一般的射程な有たない。參照語學協會會報一九三一—二年一九以下)。

　一體定義(definitio)とは何を意味するものであらうか。第一にそれはその語源が示すやうに、或る客體が他の客體から感覺的に區別される境界を見出すことである。だがそれだけでは未だものゝ本質はわかつたとはいへない。我々は次いでかくの如く境界付けられたものが、論理的に他と區別される特質を見出さなければならない。完全なる定義

はこの二つの作業を經て下されるものである。

ところが語に關してはその特質の幾つかをいふことしか出來ない。語は先づ第一に意義的單位である。私が貴方と交はす數分間の會話に於て、私は町といふ言葉を何べんも口にしたに相違ない。そのたびにそれに要する呼氣の量もちがひ、調子もちがひ、速さも相違したであらう。しかも同一の對象を指してゐると私も思ひ貴方もさう信じてゐる。それゆゑ町といふ語の統一性は音料の同一性とは關係がないことは明白である。

それでは語の統一性は何處にあるか。町へ行つてくれといふときの町と、町は自治體であるといふときの町とは、意味內容を異にしてゐる。言に於て定位されたる語は、その意味內容が特異的であれ一般的であれ、單奇的であれ集合的であれ、とにかく一つの觀念を表出してゐるが、記憶中にある語は一つの概念を擔つてゐる。言は語に關していふときは、概念の・表象への還元作用であるといふことが出來よう。眼の前に再び置くのである。語の擔つてゐる概念が、いはゆる意義である。意義は必ずしも單純ではない。語の多義性はむしろ言語的常態であるから。しかしながら一語に含まれる多くの意義は自發的に聯合される可能性を有つてゐなければならない。話手の自發的聯合の綱が切れたときは、一語ではなくて二語があるわけである。

語が概念の擔手たることは確實であらう。しかし一個の概念は必ずしも一個の語によつて表現されるとは限らない。例へば「三角形」といふ言葉は一個の概念を擔つてゐるが、この概念はまた「三個の直線に圍まれたる圖形」といふ言葉で言表はすことも出來る。それ故に語の決定規準は論理にはないことは明かである（イェスペルセン「文法の哲學」九三）。

語の統一原理が音的資料にもなく純粹論理にもないとすれば、これを求める場所は、音と概念とが結合して生ずる

形態の世界を措いて外にはない。それでは形態とは何であるか。

普通、語の形態といふと、語の音相であると考へられてゐる。マチといふ音聲連鎖が町なる語の形態であるといふ風に。我々はこれとは全く別の意味で形態を云爲する。形態とは機能によつて決定される一定の非物質的構造である。機能とは或る要素が專ら他の與へられた要素と排他的に結合し得る能力である（小林－一般文法の原理一八六節）。「町」といふ一つの言語要素は他の要素例へば「行く」とは結合することは出來ない。町は「に」とか「を」とかその他或る特定範疇に屬する要素としか結合することが出來ない。先行者とも同樣である。例へば「この町」とは言へるが「を町」とは言へない。かくの如く町といふ言語要素は他の言語要素に對して一定の機能關係を有つてゐる。この關係は複合的であるからして、それらの關係は特定の構造式を形成する。これが我々の意味する形態である。語はこのやうな形態を以て色付けられた言語要素である。だからして語の一範疇はそれのみを以ては定義されるものではない。それは他の語の範疇と共に相伴的に、同時的にしか定義され得ない。

語は事實上形態の概念を內有してゐるものであるが、それが言語要素である限りは、その形態は潛勢的であるにとどまる。從つて語はその機能を發揮することが出來ない。語は言語要素たるをやめて一たび言の要素となるに至つて始めてその色合を明確に示すことが出來るのである。言に於ける語を私は詞と名付ける。それゆえ嚴密にいへば語は文法學の對象とはならない。詞の性質については後章で述べる。こゝでは語について一言する。

このコトバあのコトバといつて、日本語では語を指すにコトバといふ記號を以てする。ところがまた、おコトバに甘へてなどいふときのコトバは言である。全く相異る二つのものを同一の記號で示すのは曖昧至極であるが、このこ

とは日本語に限つた現象ではなくて、ギリシャ語の λόγος や稍〻古いロシャ語の slovo などがさうである（アントワヌ・マルテル－ミシェル・ロモノーソフとロシヤ文學譜三〇註一）。このやうな混同は、語をその隱在性と顯在性との兩面から見たことを示すものではなからうか。語は、たとへ一個でも、言に發すれば文となり、判斷を表出することが出來るからである。

ヴント（Wilhelm Wundt）以來、語よりも文を以て先存的なものとなし、文とは意識中に現前する總體表象が部分に分割されることであると定義し（言語卷二第四版二四三以下）、語なるものを文から抽象されて出來たものであると說くことが勢力を得てゐる（參照山田孝雄・日本文法要論四、セシエー文の論理的構造一三以下）。これは發生的定義を以て最上のものとなす幻想に基く誤謬である。語の實在性（レアリテート）は疑ふべからざる經驗的事實である。しかしながら語と文とが同時に實在的單位であることを示すべき論據については、私は山田博士の說に從ふわけにはいきかねるのである。博士は兩者の別を觀點の差に歸してをられる（同書六）。私はむしろ語と文とはその屬する世界を異にするものと考へる。語は言語の單位である（參照セシエー論理的構造一四）。文は言の單位である。さうしてこの思想は夙にソ、スュールの明言したものであり（原論二一六）、現代の有力な學者たちの抱くところでもある（參照ヴァイスゲルベル・母語と精神の陶冶一二、ガーディナー言と言語九四）。

五　言の單位

言はそれ自體で意志や感情の微妙なニュアンスをたゞよはすやうな獨自のものである。かうした言はそのまゝでは

文法學の對象をなしはしなかつた。對象は、個性的なる言から抽象されたる普遍的様相であつた。言の、具體者としての、一次的展開形式は相對的線條性であつたが、いま若し言の普遍的様相についてのみいふならば、それは絶對的線條性であるといふことが出來よう。そこにはもう重加的なるものは微塵も殘つてゐないのである。このやうな非重加的な絶對的線條性の觀點から見たときの言を私は話と名付ける。話線といつてもいゝ。言ふのではなくて ――(眼に物を言はせる)――話す――(みだりに人に話してはいけない)――のである。解き放すのである。放れて走るのである(discurrere)。歐語に discursif といふ語がある。カントはこれを intuitif と對立さして考へた。後者が特異者の認識であるに對して、前者は一般者の認識である。discursif な思惟は推理によつて行はれる。discursif とは、推理的といつても大差はない。話を內容的に見るときは、やはりそれである。この形容詞から逆に實詞を作つて(discours)それに話線の意味を與へたものはバイイである(一二三、一四七、一五〇、一五七、一六五、一七三、一七五、一八四、一八六節等)。

話線はこれを無限に延長することが出來る。私は貴方にとりとめもないことを何時までも喋くることが出來る。このやうな話は原則として無限直線で表はすことが出來よう。さて我々は無限なるものを理解することは出來ない。我々自身が有限なる個體であるからである。理解とは、有限者が無限なるものを有限として同化することである。そこで話線は必然的に有限なる部分に分たれる。この部分は二項から成る。ついて語るところの項は說(propos)である。說の機緣をなすものは題(thème)である。說くためには題がなければならない。題があつても說かなければ題の內容は知られない。說と題とは互に他に依存する。廣い意味で、說を賓辭といひ、題を主辭といふ。說く作用を陳述といふ。賓辭を主辭に結びつけるものは繋辭であるが、繋辭する能力は賓辭にのみ與へられてゐる。いま題をA、說

をZ、繫辭をcとするならば、話の部分はすべて、A＋c＋Z の公式で表はされるものではなくて、むしろ A×cZ の公式に當嵌まる。Zはすべてcを含む故に、これを省略するならば、話の部分はすべて AZ の公式で示すことが出來る。AZ の公式を含むところの話の部分を統合(syntagme)といふ(參照バイイ四一節)。話線は一個以上の統合から成る。

統合の構成要素を辭項又は單に辭と名付ける。私は(A)町に行きます(Z)が一つ。貴方も(A)行きますか(Z)が一つ。統合はすべて二辭から成る。言換へれば二項的である。

統合は話即ち言の單位であるからして本來實現されたるものであるが、二辭項の顯在性を失ふことなくこれを非限定界に還元することが出來る。この作用を凝縮(condensation)といふ。例へば、「人が‐行く」を「行く‐人」。「行く人」は非限定である。だからしてそれは語の群であつて文ではない。私は文なるものを、實現されたる統合であると考へるからして、凝縮せる統合には文なる名稱を與へることを躊躇する。セシエ(Albert Sechehaye)は私のいふ本來の文を思惟文(phrase-pensée)と名付け、凝縮せる統合を觀念文(phrase-idée)と名付けてゐるが(ブーギュ言叢一一五以下)、この命名法によれば文は言の世界のものでなくなり、言語に屬することとなる。これはソッスュールの根本思想と矛盾するものである。

凝縮せる統合に於ける題を被定辭(déterminé)といひ、說を定辭(déterminant)といふ(バイイ四一節)。(バイイの符號によれば、被定辭＝t, 定辭＝t′)。「行く‐人」の行くは定辭であり人は被定辭である。凝縮的統合は實現ではない。

「行く人」は記憶映像であり、言語界に住してをつて、そのまゝでは具體的なる何物をも喚起することが出來ない。この統合が實現されるがためには定位されなくてはならない。定位者は立場にあることもあれば話線中に顯在することもある。いづれにせよその定位者は「行く人」を新たに一個の辭項と看做し、自らその相手項となるのである。行く人があるといふ場合には、行く人がは主辭であり、あるは賓辭である。行く人であるといふ場合には、行く人は賓辭であり、であるは繫辭であり、主辭は立場に任されてゐる。外顯化すれば、それは行く人であるとなる。そこで我々は、it(又は ti 順序はこゝでは問題外)は更にそれ自體がA又はZとならなければ言の世界に入來ることが出來ないといふことを知るのである。

統合は AZ のみを以て實現され得るものであるかどうかは後の考察に委ね、こゝでは單に、實現されたる統合を文であると定義するならば、語と文の辭項とは何らの一致をも示すものでないことは明かである。一辭項は數語から成ることもあり、逆に一語は二辭項から成ることもある。人が行くの人がは主辭であつて二語から成る。ラテン語の it は第三者が行くの意であるが、主辭は語尾 -t で示され、賓辭は語幹 i- で示されてゐる。しかもこれを二語と見る者は一人もない。it は二辭項を含み且つ實現されたる統合であるから、文である。橋本進吉先生の考へられる文節なるものは(ケサ|アサガオガ|サキマシタは三個の文節から成る文である)、私の意味する辭とは二つの點で相違する。第一、文節はその數が豫め決定されてゐない。第二に、文節は必ず一個以上の語から成る(國語學概論上二〇)。この點で先生の思想はハーフェルスの思想と殆んど全く一致する。ハーフェルスによれば、文は原則として語からではなく語群から成る(說明的統辭論一三)。しかしながらこれらの定義は餘りに狹隘であるといはなければならない。

凝縮の仕方は言語別によつて色々である。或る言語は AZ の順をそのまゝに tt と凝縮するが、或る言語は順序を逆にして tt と凝縮する。人が行くを行く人とするのは後者の例。l'oiseau chante を l'oiseau chantant とするのは前者の例。從つて凝縮の仕方は言語を特性付けるものである。

統合の第一の特性は、二辭項を含むこと卽ち二肢的であるといふことであつた。第二の特性は自由といふことである。自由とは、統合の構成部分の一が同一範疇に屬する他の任意の記號と交換することが出來るといふ意味である(ハイイ四三節)。人が行くは一方に於て人が來ると交換可能である。なぜなら來るは行くとその屬する範疇を同じくするから。他方に於て、人が行くは雲が行くと交換可能である。なぜなら雲は人とその屬する範疇を同じくするから。

逆に、二辭項を含み、兩者が交換可能であるときは、常に統合がある。かねもちは一つの統合である。なぜならそれはかね・もちといふ風に二部分に分たれ、その一が他の記號を交換することが出來るから。例へば一方に於てかねもち、かね・かし、かね・いれ。他方に於てやり・もち、こ・もち、かんしやく・もち。

統合の部分の一又は雙方が、獨立しては用ひられない、いな嚴密にいへば、今日では用ひられなくなつた形を呈してゐても、統合たることには差支はない。例へばかな・あみ、かな・やま、かな・ぐ。けれども今では全然その部分に分つことが出來なくなつた語は、既に統合ではない。例へばなべ(鍋)は今日の話手にとつては統合ではない。この語はもとな・へと分たれ、なは魚、へは容器(瓮)を意味してゐた。卽ち一方に於てな・や(魚屋)、ふ・な(鮒魚)、さか・な(酒魚)、等、他方に於てつるべ(釣瓮)、いむべ(忌瓮)、いはひべ(齋瓮)等のやうな語の記憶が、なべの統合性を保證してゐたのである。このやうに固と二辭であつたものが星霜を閲するにつれて一辭と感じられるやうになる過程が、

かの史的言語學でいふ接合である。接合は手順ではなくて過程である。過程は時間的要素を含むからして文法學の對象とはならない。

しかしながら統合の自由性には無限のニュアンスがあることは事實である。かなへ(鼎—金瓮)、かなづち(金槌)、かねまはり(金廻)は順次に全くの不自由、少量の自由、大量の自由を示してゐる。凝縮的でない統合にあつては完全なる自由が支配する——かねがある。自由を全く缺く記號は單語である——この國では語を單語といふ習慣があるが妙な話である。單純ではなくても語であり得るのだから——。少量にもせよ自由があればそれは統合である。統合はその自由性の程度に從つて、緊密統合と弛緩統合とに分つことが出來、或る人は前者を形態法(morphologie)と名付け後者を統辭法(syntaxe)と名付けるが(參照フレエ八七)、兩者の間に原理的差異の認められないことは勿論である。それゆえ我々はこの命名法を採りたくない。命名はなるべくものの本質に則してなすべきであるから。

統合の本質が自由であるといふことは、突きつめていへばその部分卽ち辭が範疇として思惟されてゐるといふことに換言することが出來る。辭は個體としてではなしに範疇として思惟されてゐるのである。だからこそ辭である。かなあみが統合であるといふことは、その辭の一例へばあみが網といふ特定の物體として表象されてゐるのではなくて、網といふ特定の物體が屬するところの實體として思惟されてゐるといふことである。これは論理的な觀點から述べたのであるが、心理的な觀點から見るならば、同一範疇に屬すると思惟されるおの〳〵の個物は、一定の特徵を媒として互に聯合してゐるわけである。それ故に統合關係はすべて二連の聯合關係を含むものである。比喩的に云へば、統合は表であり聯合は裏である。表のない裏がない如く、裏のない表もない。言が秀でて統合であり、言語が秀でて聯

合であるならば、言と言語との關係は表裏をなすものといはなければならない。それゆゑ言の學と言語の學となす二元論は我々の恣意の産物である。尤もその恣意は必須ではあるが。言の學と言語の學との區別が對象論的ではなくて觀點的つまり方法論的なる所以はこゝにある。對象は一である。文法學は言語活動なる實在に對する一面觀に過ぎないのである。有限なる我々は非限定の世界を有限としてでなくては理解し得ないといふ一般的事實の、一つの顯れを我々はこゝに見る。

論理的に考へるならば、右の如く統合と聯合とは同時的現象であるが、心理的にその發生の模樣を觀察するならば、統合の方が聯合よりも先に立つ。一たび現實に體驗したものでなければ何物も記憶されるものではない。顯は陰の因、光は闇の因である。言は言語の泉である（參照ソッスュール四〇）。從つて個人に於ける言語の成立は、言の言語への不斷の還元作用によるものでなければならない。言語の側から見るならば、聽手の立場が一義的である。聽手にとつては話線が眼の前にある。統合は最初は先づ「單語」として知覺される（A）。この「單語」はその瞬間には全く恣意的であつて、どの記號からも線を引いてゐない。ところが第二の聽取に當つて（B）、最初の記號の一部と等しいものを第二の記號の一部に認めたときには、聽手の頭の中で A=ab, B=ac なる二重の分析が同時に行はれる。こゝに於てAはBと線を結ぶ。ショーペンハウエルのいはゆる Motivation の作用、內からの因果性が生ずる（充足理由の原理四三節）。幸ひにして db（又は bd）なる構造を有つCなる記號を聽取する第三の機會を惠まれたならば、二回目で未だ解釋し切れなかつたAの要素bが更に因緣付けられる。かくしてAは完全に統合化されるのである。無緣のものを因緣付けようとするのは理解者としての人間の意志である。

以上の考察は更に詳述さるべき二つの事項を含んでゐる、一つは言語の發展に關し、も一つは分析の規準に關し。言語の成立卽ち組織化が聽手によつて行はれることはいま說明した通りであるが、これに反して言語の發展卽ち破壞は話手によつて行はれる。話手は常に新鮮なる直觀を言に於て表出しようとする。彼は語を以ての構成者、作曲家である。語は古くとも構成は絕えず新しい。話手は絕對に同じ文を二度と構成することは出來ない。語は同じとしよう、文の型は同じとしよう。けれども文脈、立場は刻一刻變ずるのである。立場の變化は究極に於て時間の經過に歸着する。時間性は主觀の本質である。さうして話手とは、言ふ迄もなくこの私であつた。

バイイは、聽手は言語の味方であるといつてゐる（生活表現の言語學二八九）。裏からいへば、話手は言の味方である。逆にいへば、言はとりわけて話手の關心事である。話手が彼の屬する共同社會の內部に於て占める自己の立場を一々の言行爲に當つて自覺するときに、彼の言は特異のものとなる。素材は同じでも、形成法は同じでも、言は常に新たなる立場に於て蘇生する。言語發展の契機はこゝにある。言語改新の絕對無意識の學說は今日では廢れてゐる（バイイ-生活二八八）。フォスレル（Karl Vossler）は言語美學の立場から同樣のことを述べてゐる、「或る種の美的同感又は享樂なくしては、極微の音韻推移すら起り得ない」（言語哲學一八）。このことを實證する餘裕を私はいま有たないが、言語感情が文法範疇の意識よりも遙かに早く發生することは說明の要を見ない。かれは兒童の第一期に、殆ど生れながらにして、獲得される。これは遙かに遙かに後に學習される、しかも甚だ不確かに、間違ひだらけに（シュッハルト語錄二九三—四）。さうして、言ふ迄もなく兒童は自己中心的である。言語發展の源は子供部屋にある。

子供と大人、話手と聽手——非組織と組織、カオスとコスモス、　カオスからコスモスへ、　世代が替つてきた

カオスへ。絶對固定の文法はない。發展の見地からすれば、固定は永劫の幻影である。我の立場に立つときは、言語は我と共に成長する。文法はなくて、文法化がある。

理解するとは、分ることである。分るためには二箇項が現前しなければならない。廣い意味に於て統合がなければならない。統合は勿論定位されてゐなければならない。然るに定位といふことは空間的次元にのみ行はれるものであつて、時間の流れとは矛盾する。時間を超越してのみロゴスはあり得る。言換へればロゴスは我を脫してゐる。單なる我ではなくて我と汝との間にのみロゴスの居住地はある。こゝに文法の本質が時間とは無關係なることの哲學的理由があるのである。

人は話手としては、感性である。聽手としては、理性である。ユディキウム・アイステティクムではなくてユディキウム・ロギクムを（バウムガルテンの言葉を借用すれば、參照クローチェ・論理學獨譯七二）定義上對象にとるところの文法學は、從つて當然聽手の立場に立つものでなければならない。

分るの問題は、つまりは聽手が如何に分けるかといふ問題に歸着する。若しも話手に於ける統合の部分が常にそのまゝ聽手に於て受容れられるならば、問題は極めて簡單な筈である。事實はこれに反する。前述の如く統合を支持するものは聯合である。聯合とは記憶である。記憶は個人毎に相違する。識者と文盲とでは記憶の質も量も同じでない。そこで或る場合には話手の望んだのではない場所で統合を切斷するやうなことを聽手はする。いはゆる「異分析」(metanalyso)（イェスペルセンの造語、言語三〇八）の現象がこれである。私の家で使つてゐた朝鮮下婢は間違つたと言ふべきをマッチガチガ。タと言つた。これは違つたを先に覺えたためにマで切れ、そこへ更に間違つたを聞いてマチ・

ガ・アッタと分析し、兩語が混線して出來たものである。外來語では地名の浦鹽が適例である。ロシヤ語では東國を治める地の意であるから、ロシヤ人の意識では明かにVladi-vostok(治東)と分析される。我々はこの名稱の語源を知る準備がないからウラジオ・ストックと切るのである。「異分析」は聽手にとつては何らの發展でもない。件の分析は彼の言語活動の組織の行ふところであつて、當然の分析である。「異」とは話手からの觀察に過ぎない。ソッスュールはこれを話手の主觀的分析と稱へてゐるが(原論三七五)、「話手」は聽手の意味にとるべきであらう。主觀的分析は常に組織的分析である。記憶の側から見れば、自發的聯合である。文法の原理はこゝに求めなければならない。

くどく說明すれば、自發とは組織の自然的反應である。既得知識の反映である。聽手が聽衆にまで倍加されても同じことである。聽衆の主觀的分析は彼らの知識の反映である。歷史的意識の多寡は、その民族の言語的分析の仕方に影響する。

招待——讀者よ、言語學原論補說三五七—三八九頁を味讀してみませんか。そこには主觀的分析の優越性と下位單位決定の方法と語源論の本質とが、明晣を極めた文章で語られてゐます。

六　共時論

言は話となり、話は統合となり、統合は詰まるところ自發的聯合に歸着するからして、言の論理たる文法は當然自發的聯合のうちにその原理を有つ。

いまこゝに「あまだれ」といふ一つの統合がある(セセ)。これが統合と感じられるのは、その部分があま・がへる、あ

ま・がさとかす・だれ、よ・だれとかに既に顯在したことがあるからである。あまだれのあま又はたれは、一面に於て範疇としての資格に於て統合の部分を成す。しかしながらこの資格は他面に於てあまがへるのあま、あまがさのあま、すだれのたれ、よだれのたれといつた具體的在體として嘗に顯現したことが記憶されてゐて始めて獲得されるのである。文法上の範疇は突きつめてみれば常に資料的要素を背景に有つてゐる(ソッスュール二七八)。それゆえ文法範疇はいはゞ經驗的範疇である。

我々が記號を覺えるのは漸を追ふてなすものであつて、あまがへるとあまがさとを同時に我物としたのではない。あまがへるを知つた時とあまがさを知つた時とには、數日、數ヶ月、乃至數ヶ年の時間的間隔があつたであらう。けれども先に知つたあまがへるはあまがさを知る時まで記憶されて來てそれと聯合する。この聯合は反省的でなくて自發的であり、更にこの再生傾向は後々まで固執する。だからして範疇的なる辭の含むおの〳〵の具體的在體は、その攝取・同化の瞬間に於て同時的なのではない。おの〳〵の記號は今の私の心に於て共に記憶され、互に聯合する傾向を有つといふ意味で同時的存在であるといへるまでゝある。能動受動いづれにせよ再生傾向は言語組織の成立を可能ならしめる根本特質である。

一言語組織を構成するおの〳〵の記號は、これを孤立單獨に觀察するときは、生命の長短を別にし價値の大きさを異にする。けれどもそれを組織に關聯せしめて觀察するときは、おの〳〵は互に他に依存するところの共存體である。後者の觀點を共時論(synchronique)といふ。共時論的觀點から眺められた言語組織を共時態 (synchronie) といふ。ソッスュールが名付親である。言語を實現するには、それに含まれるおの〳〵の記號は待機の狀態になければならな

い。共に生きてゐなければならない。生ける記號を――死せる記號ならこれを研究者の意識に蘇生せしめて――生けるものとして觀察するのが通時論(diachronique)である。この意味で共時論は生命論であり、通時論は生物學である。

共時論・通時論の別を最もよく髣髴せしめるものは、將棋との比較である(ソッスュール一七七以下)。第一におの〳〵の駒には一定の能力が賦與されてゐる。けれどもそれは潛勢力であつて、それの價値は全く場面全體の情勢によつて決定せられる。第二に情勢は瞬間毎に推移する。最後に一つの場面から他の場面に移るには駒を一つずらせばいゝ。それが全體の平衡を替へるのである。共時言語學は要素を價値關聯に置いて考察するものである。通時言語學は要素を價値關聯から切り離して考察するものである。それゆえ前者は體系論であり後者は要素論である。共時言論學の創始者は文法學を言語の共時論に歸屬せしめたやうである。しかし私は、以上の考察からして、當然文法を言の共時論の中に入れなければならない。ところで言には定義上二態の別はあり得ないからして、結局文法=共時論なる命題は贅言である。それと同時に歴史的文法なるものゝ觀念は全く自家撞着のものといはざるを得ない。

それでは言語の學に共時・通時の二態の別を設けることは出來ようか。この點に關しては遺憾ながら充分の確信を以て答へ得るほどまだ考へが熟してゐないので、他日を期したく思ふ。

七 文

話線を劃する單位は統合であるが、統合が言に於て眞に實現された場合は文となる。文法はどこまでも言の學である限り、一切は文の見地から眺めなければならない。ところが文ほどまた定義しにくいものはない。諸說紛々として

一として断倒的なものがない。或る者は論理的觀點から、或る者は言語的觀點から、或る者は心理的觀點から定義しようとする。

文はその內容から見れば、一つの論理的構造である。外形から見れば、或るものの言語的表出である。一つの論理的構造を言語を以て表出する作用から見れば、一つの心的過程である。第一の見方に從へば、文とは命題である。第二の見方に從へば、文は語の集合である。第三の見方に從へば、文は總體表象が互に論理的關係を有つ成分に分解されるときに成立する(ヴントによる。ジクヴルトはむしろ綜合に重きを置く。リース-文とは何かの卷尾に定義集あり)。文がこの三つの樣相によつて規定されてゐることは否めない。

バイイの近著「一般言語學とフランス言語學」は文の本質に對して新しい光を投じたものである。私は暫く彼の記述に從つて說明してみたい。

論理的にいへば、文とは判斷の傳達である(Une phrase est la communication d'un jugement)。

判斷とは陰在的表象を確言によつて現示したものである(Un jugement est une représentation virtuelle actualisée par une assertion)。

雨の表象は思惟の主體がそれを眞である僞である又は可能であると思惟しないうちは陰在的であるに止る。この陰在的な表象が現示卽ち定位されるのは確言による。定位者は思惟の主體である。

雨ですね、やつぱり。

この瞬間に雨なる表象は定位された。降つて來たのは雨であることを私は確言する。貴方もこのことを確言しませ

んか。論理の世界の言葉に飜譯すればから言ふのである。それゆえ表象は判斷の對象である。それは確言と共に判斷の主辭に對する賓辭を形成する。かやうに現示された表象を理（dictum）といひ、理を現示するところの確言を論(modus)といふ。理は判斷の對象である。論は判斷の價値である。理は論ぜられて始めて實踐的事實となる。理を判斷の主體に結付けるものは論である。確言はこれを結果から見れば智的行爲であるが、發生から見れば信念と意欲を豫定してゐる。

論は純粋論理的に見れば、理を思惟主體に結付けるところの繫辭である。確言を示す用言は論の用言（verbe modal）と名付けることが出來よう。けれども實踐的生活に於ては確言は常に感情・意志の無限に變異的なニュアンスを帶びてゐる。快不快、希望、恐怖、賞讃、誹謗といつたやうな。それ故に論の用言はまた同時に様(法)の用言（v. de mode）である。様態(modalité)とは論の言語的表現をいふ。論は論理的には常になければならぬ判斷の部分であるが、言表形式では蔭されてゐることが多い。卽ち內顯的に表出されるのである。內顯的表出には種々の度合がある。例へば論の用言が非人稱なることがある。私は列車の壁に「喫烟を禁ず」といふ揭示を讀む。禁ずるものは當局であることは言はずと知れてゐる。私が横着にも平氣でスパ〳〵やつてゐると車掌が來てお煙草は禁じてありますといふ。そのときにも私は禁ずる者は車掌ではなくて彼の上司であることを心得てゐる。

いはゆる法の助動詞なるものは、論の主體を蔭す更に手の込んだ內顯的表出手段である。雨が降るでせうは雨が降ると私は思ひますに等しい。確言が皆既蝕のやうに全く理のうしろに蔭されて了ふことがある。雨が降りますといつた形がそれである。これは論理的には、雨が降ることを私は確言するといふことである。こゝでは論の觀念が理の用

言(verbo dicta)の中に折込まれてゐるわけである。實際の言ではこのやうな形式が最も頻繁である。

樣態は用言を缺いた理に於てさへ表出されないではゐない。

おい、傘!

このときの音調は正に論である。なぜならこの音調はお前が私に傘を取つてくれることを私はお前に要求するといふことを示してゐるからである。だからして音調は立場ではない。言語記號として他のものと優に拮抗し得る立派な手順である。文法學者が分節音のみを本來のものとして、音調を文法學の領域から排拒してゐるのは大なる誤りである。

理の内部構造は第五章で述べた如く題と說とからなる統合である。論もこれに倣ふ。私は(A)お前に要求する(Z)—お前が(A)私に傘を取つてくれることを(Z)。そこで一つの文は常に四辭項を含んでゐる。たゞ、おい傘! では理の說しか外顯的に言表されてゐないだけである。

けれども理の二辭項も論の二辭項も純粹論理的關係にあつては全然同じものを示すからして、こゝでは單に題の辭と說の辭として論じて差支へない。

我々は說を題に結付ける力を有つ辭を用言(verbo)と名付ける(この譯語については山田博士前掲書一一頁以下參照)、だからして用言は本來繫辭的なものである。私は繪を描くの描くは動作を表はすが故ではなくて、「描く」といふ說を「私」といふ題と結付けるが故に動詞である。この文を凝縮するときは「私が描いた繪」となる。これはもう定位されてはゐない記憶的記號である。もう一層凝縮するときには「私の繪」となる。立場によつて豫め私の描いたことが相手に承知

されてゐるときには「私の繪」はそれだけで私の描いた繪を指すに充分である。いづれの場合にせよ、「描く」なり「描いた」なり「の」なりは、主辭なる「私」と顯在的又は陰在的な「描く」といふ賓辭とを結付ける繋辭の役を務めてゐる。それゆゑ文法關係はすべて用言的である。文法は悉く用言の中にある。逆に、用言はすべてそれ自體で文法を表出し又は文法を含んでゐる(バィィ四六節)。

ギリシャ語の *ῥῆμα* はこの關係を明瞭に示してゐる。プラトンの Kratylos 399 a—b に、*οἷον « Διὶ φίλος » —τοῦτο ἕνα ἀντὶ ῥήματος ὄνομα ἡμῖν γένηται*「例へば dii philos(神の友)であるが、このレーマの代りにオノマが我々によつて作られんがためには云々」とあり、こゝでレーマとは文乃至我々のいふ凝縮統合を指し、オノマとは語を指してゐる。ソクラテスは、この統合を一語に直すために我々は先行語の末音 i を減じアクセントを代へて *Δίφιλος* とすると說明してゐる。またアリストテレス詩學第二十章(1457*a*)に、*ῥῆμα δὲ φωνὴ συνθετὴ σημαντικὴ μετὰ χρόνου ἧς οὐδὲν μέρος σημαίνει καθ' αὑτό, ὥσπερ καὶ ἐπὶ τῶν ὀνομάτων*「レーマとは時を示す合成音であつて、そのいづれの部分も、オノマにおけると同樣、それ自體では何ものをも示さぬものである」とあり、こゝではレーマは明かに動詞を意味し、オノマ即ち名詞と對立せしめられてゐる。

プラトンの用例では二語を指し、アリストテレスの用例では一語を指してゐるレーマといふ言葉が、兩者に於て共有してゐる特質は何であらうか。それは陳述といふことでなければならない。陳述とは、ついて語る作用である。私は繪を描くといふ一文に於て、文法上重要なのは繪具を以てカンヴス上に物象を現出せしめる行爲の觀念ではなくして、「描く」といふ或る一つの行爲の觀念が私について語られてゐるといふ事實である。それゆゑ日本語の描くといふ

語は描くといふ特定觀念とついて語る行爲とを累加的に表出するところの記號である。純粹性に於ける用言は、ついてそのものでなければならない。ついて——そこに文法がある。

おい、をるか——垣根の聲

をる

「をる」は私についてその存在を陳述するところの言葉である。ついてと存在と、やはり累加的である。ついての主體の表出は立場に任されてゐる。をるは用言であるが、右の例にあつては同時にまた文である。ラテン語の verbum といふ言葉がこの兩義を有つてゐた。用言的世界は文の世界であり現實の世界である。

ついてとは要するに關係といふことである。二辭項が用言によつて互に結びつけられることが、最廣義に於ける轉移性(transitivité)である。轉移性の本質は心理的な不完全感にあるとセシエなどは見てゐるが(論理的構造八〇)。もう一層突込んで考へてみれば、辭項が辭項たる所以が轉移性である。通俗的には、私は描くは不完全である、なぜなら何を描くかゞ解らない、繪を描くといふ風に直接對象辭を外顯的に述べなければ意味が完結しない、描くはそれ自身では不完全感を抱かせるから轉移性用言即ち他動詞である、正規的に受身形を有ち得るものは他動詞のみであるといふ。しかしながらこの意味に於ける不完全感は絶對的區分原理となり得るものではない。なぜなら例へば一方燒くの如き動詞にあつては何を燒くかゞ思惟されねばならず、その點でそれだけでは不完全感を抱かせるには相違ないが、他方妬くの如き動詞にあつては妬く行爲の對象は主體から見て羨むに足る相手方の事情であつて、それは言外に明瞭に意識されてゐるにも拘らず敢てそれを言表する必要をみず、加ふるに、人に妬かれるといふ用法に於けるが如く、

受身形になるときは對象辭が主辭に立たずに、對象辭によつて示される事情を有つ主體卽ち相手そのものが主辭に立つからである。それゆえ轉移性の本質を不完全感にあるといふのは不適當である。我々は主辭對賓辭、又は被定辭對定辭の關係そのものを轉移性と稱したい。

　轉移的關係は原則として二通りある。內屬の關係(rapport d'inhérence)と外附の關係(r. de relation)とである。內屬とは二辭項間の親密なる相互透入であつて、例へば實體とその性質(薔薇は美しい)、又は過程とその仕方(巧みに描く)、又は實體と狀態に於ける實體(兄は畫家である)、又は實體と時間に於ける實體(兄は畫家となつた)等の間の關係である。外附とは本來互に外面的なる二個の對象がいまこゝで話手の志向によつて結合せしめられて出來た關係である。例へば本が机の上にあるに於ける本と机とは元來何らの必然的關係をも有するものでないが、この刹那私の興味に於て一つの關係內に置かれたのである。凝縮すれば「机の本」となる(參照フレエ一五二、バイイ四八、五〇節)。

　內屬の文法的表現は照應(accord)である。外附の文法的表現は制辭法(rection)である。照應は、フランス語などでは、屬性辭が形容詞なるときは主辭と共に性及び數の一致によつて行はれ、それが動詞なるときは數の一致のみによつて行はれる。La terre est ronde(女性單數)、La terre tourne(單數)。しかしながら性の照應をなすものは形容詞であると逆に定義するならば誤りである。なぜなら例へばロシヤ語では、動詞の過去形に於ても性の照應が行はれるからである、ja skazál「僕は話した」、ja skazála「妾話しましたの」。尤もこの形は、ポーランド語などがはつきり見せてゐるやうに、元來動詞の分詞形でありはした。けれどもそれが故に今日この形が動詞であることを否定するわけにはいかないのである。共時態と通時態とを混同することは絕對に許されないからである。

照應を純粹に示す語は「(で)ある」といふ語である。吾輩は猫である。けれどもこゝに置物の猫があるといふ場合の「ある」はもう純粹の照應の繋辭ではない。それは定在と純粹繋辭とが果加された用言である。(で)ある以外の一切の用言は果加的である。ソッスュール的術語でいへば語彙化せる記號(signe lexicalisé)である。山田博士のいはれる屬性觀念を有つた用言である。スペイン語が繋辭的記號と定在の記號とを使分けしてゐるのは頗る興味あるものといはざるを得ない。

Es abogado. (彼は辯護士である)

Está en Madrid. (彼はマドリッドにゐる)

これに對してフランス語は

Il *est* avocat.

Il *est à* Paris.

次に、制辭法の特徴は、可逆性にあるといふことが出來る。雨垂石を穿つは石雨垂に穿たるに移される。照應の場合に殆どすべての用言が果加的であつた如く、制辭法の用言もまた殆どすべて果加的である。これに對して唯一の純粹制辭用言と看做し得るものは「する」といふ語ではなからうか。例へば穿つは穿孔することである。花を見るは花を見物若しくは觀賞することである。

「(で)ある」と「する」とは、その本質から見れば蒼白い記號である。その價値から見れば或る人のいふやうに萬能記號である(フレエ一四四)。

轉移性は、内屬的であれ外附的であれ、言語的には常に用言によつて表現される。逆に、用言はすべて轉移性を表現するところの語である。このことはあらゆる言語についてアプリオリに妥當する。

用言のいはゞ骨骼をなすものは純粹陳述性である。これの上に、「ある」「する」以外のすべての用言は肉附けられてゐるのである。その肉附方の如何によつて、國語別による用言の定義の仕方が相違するのである。純粹論理の範疇と社會的論理たる文法範疇とが一致しない理由はこゝにある。一致しないながらも後者が常に前者を顧慮する必要がある理由もこゝにある。言語形態を思惟形態から全然分離して考察することは意味のないことである。言語は思惟と並行しはしないが全然背馳するものでもない。

文をその發生の相から心理的に考察するときは、單語文(monorème)から複語文(dirème)への發展とみることが出來る。

幼兒が汽車を見てポッポと叫ぶ。これはいはゆる擬音語であるが、幼兒がポッポと呼んだ刹那、それは單なる語ではなくて、文である。汽車が煙突から勢よく煙を出して驀進して來る。この光景は幼兒に强烈な印象を與へずにはゐない。ポッポはその印象のインデックスである。ポッポとは大人の言葉に飜譯すれば、汽車が走つて來る、愉快だなとなる。ポッポは汽車の觀念そのものではない。排氣筒の音でもない。一々の言行爲に當つて一々その値を異にするところの感激の表出である。分節音としては一語であるが、その概念を明確に指示することの出來る記號である。幼兒に於けるポッポは常に文であることに於て、良人が玄關先で細君に向つておい傘と言ふときの傘とは根本的に相違する。傘はこゝでは臨時的に文となつたのであつて、嚴密にいふときは、それはむしろ立場を主辭(私)とするところの

賓辭である。おい傘は必要なる二辭の一を立場に委ねたのであつて、分節音を惜んでゐる。會場が簡潔を要求したからである。略除(ellipse)なる語を、辭を省略するといふ意味に解するならば、傘！は略除文ではない。所要の二辭が共に定位されてゐるからである。否、その意味に於ては凡そ略除文なるものはあり得ないのである。「一つの表現は、それが與へられたる立場に於て——臨時に聲の調子や表情・身振などと協力して——話手の思つたことを完全に聽手に傳へることが出來た場合には、略除的なることは決してない。」(カレプキ・文法學の新建築一二)。略除文ではなくて、簡潔文若しくは短文といふべきである(同一三)。しかしながら立場的記號は、必要によつては話線的記號によつて置換され得るといふ點に於て、一般の分節的記號とは選を異にする。立場は作用的無である。それは無なるが故に刹那刹那に新たなる限定を受けなければならない。これに反して、話線は有限なるが故に限定を受ける餘地が限られてゐる。餘韻がない。明斷の欲求は餘韻なき文を要求するのである。

——取つてくれ、早く

——何でしたつけね

——傘をさ

この對話では、立場が限定され切らないうちに話線が完結したために、相手は更に目的物の何たるかを問ひ返さなければならなかつた。取つてくれ傘を、又は傘を取つとくれと言つたならば、不理解に陷ることはなかつたであらう。勿論またその傘は特定の傘たることが對話者のいづれにも豫め知られてゐなければならないが。嚴密にいへば、話線は立場を離れては永遠に定位されぬものである。不完全感は絶えず附きまとふ。或る部分を現示しないでおくことを

略除と稱するならば、話線は常に略除的である。

ところが先の例に於けるポッポは常に價値の充實した記號である。ポッポは立場といはゞ合生した記號である。セシエが、言語から借用した一個の觀念の記號を用ひながら、自然的表現の一切の資源（情況、身振、表情、音調）を介して思惟が表出されるに至る行爲と定義するところの單語文なるものは（論理的構造一三）、正にこれである。

兒童がその精神發育の第二段に達すると、こんどは單語文では我慢が出來なくなる。ポッポ が、パパ・ポッポとなる。これは大人の言葉に飜譯すれば、お父さん汽車が走つて來るのを御覽なさいとなる。論理的用語に直せば、私は汝お父さんが汽車の走り來るを見ることを要求するとなる。こゝでは判斷の二辭が共に外顯化されてゐる。このやうに、本來互に他に依存することのない並置された二記號が精神的に綜合される作用を同位法（coordination）といふ（セシエ一九）。同位法は單語文が複語文へ轉化する最初の姿である。日常生活の言は多く同位文でなされる。さて理性が一層發達して來て、二物間の論理的關係が判然するやうになると、今までのやうに二物が對等の相關關係を持するに止まらず、一が他に從屬せしめられる。かくて二辭項は從屬法（subordination）の關係を生む（同二一）。二辭項の分節作用はこゝに於て完成する。

單語文はいはゆる文法未成の言語活動（セシエ・理論言語學七〇）に屬し、組織的言語活動を對象とするところの一般の文法に於けるよりも、むしろ文法の個體發生（ディットリヒ・言語心理學大綱卷一、一四二節）を取扱ふ兒童語研究に於て重要な意義を有つてゐる。いふところの文法は常に複語文を本體となすものである。我々がそれと斷らずに文と稱へるときは專ら複語文を指す。

文は、これを素材の面から見るときは、二辭項の轉移關係であるが、これを作用の面から見るときは、轉移關係の現示(actualisation)である。現示を缺くときは、只單なる統合しかない。しかし文法學は文を優先的にその對象に取るとはいへ、凝縮せる統合を見棄てるならば餘りに狹痩凋渇したものとならざるを得ないであらう。凝縮は、言から言語への還元である。凝縮的統合がその前身たる文を豫想せずに見られたならば、それは單純なる語と大差ないわけである。凝縮的統合は現示的統合卽ち文との關係に於て見られて始めて文法學的意味を有つて來る。私は凝縮的統合を句と名付ける。啼く鳥は句である。なぜならそれは鳥が啼くを凝縮したものであるからである。この凝縮の仕方は言語を特性付けるものである。いま日本語、朝鮮語、フランス語、ドイツ語、英語、ロシヤ語の六ケ國語で、鳥が啼くなる一文を如何にして句に凝縮するかを觀察してみよう。

日 tori ga naku ——→ naku tori.

朝 sę ga ùnta ——→ ùnųn sę

フ l'oiseau chante ——→ l'oiseau chantant.

ド der Vogel singt——→ der singende Vogel.

英 the bird sings ——→ the singing bird.

ロ ptíca pojët ——→ pojúščaja ptíca.

以上の例を見るに、一方に於て、啼く觀念を示す動詞が文に於ても句に於てもその音相を變じないものと(日本語)變じるものと(其他)ある。他方に於て、主辭-賓辭に於ける順位をそのまゝにして被定辭-定辭となすものと（フラン

ス語)、これを逆にするものと(其他)ある。この二つの事實は文法學上等閑に附しておいてい丶ものではない。是非とも整然たる調査を要するものである。

序ながら、右の例に於ける啼く觀念を示す動詞の代りに赤い觀念を示す形容詞を置いてみたらどうなるであらうか。

日　kono tori wa akai ⟶ akai tori.

朝　i sẹ palta ⟶ pulkụn sẹ.

フ　l'oiseau est rouge ⟶ l'oiseau rouge.

ド　der Vogel ist rot ⟶ der rote Vogel.

英　the bird is red ⟶ the red bird.

ロ　ptíca krásna ⟶ krásnaja ptíca.

この場合では、辭項の順位は前の場合と全然並行してゐるが、音相の變化は同一ではない。文と句とに於て形容詞がその音相を變ずるものは、朝、ド、ロの三ヶ國語であり、日、フ、英の三ヶ國語では不變である。なほ、辭項の順位はロシヤ語などでは比較的自由であるが、日本語や朝鮮語では絶對的に固定してをり、佛獨英の三語では文體上の都合によつて多少の融通が利くといふ事實もまた見逃すことの出來ぬものである。

文も句も、共に共時論的事實として我々はこれを意識する。しかしその一のみでなくして一から他への移行が問題となる。だからして眞の意味の靜態ではなくして動態に關係してゐる。動態を取扱ふ文法學の部門を私は動態論と稱

したい。機能論と稱へる人もあるが、機能は動態と限らず文法的辭項一般の本有觀念であるから、曖昧である。何論は常に靜態論的考察を施されなければならない。逆に、文は靜態論的考察のみならず、動態論的にも考察されて始めて完全にその文法的容貌が明かになる。

八　文法範疇

辭は本來論理的な概念である。純粹に關係を示すものであるから。けれども純粹に論理的なる辭は言語の世界には實在しない。純粹辭項は原素の如きものであつて、現實には化合物となつて現はれる。文法學上でいふ辭はこれである。化合の仕方は時間的にまた空間的に制約されてゐる。言換へれば歴史的に社會的に規定されてゐる。辭はそれ自身に内容を具へてゐるのである。この内容がいはゆる文法範疇である。

こゝに「行く」といふ言葉がある。「行く」といふ言葉の示す概念は、物體の遠退的移動である。しかし「行く」といふ言葉そのものは、物體の遠退的移動そのものを只單に指してゐるのであらうか。その逆が眞であることを悟るには、例へば「行け」といふ形と對照させてみるだけで充分である。行けとは貴方がこゝから向うへ移動することを私が貴方に要求するといふことである。いはゆる命令形とは、話手の意欲の觀念を聽手の動作の觀念の記號即ち理の動詞の中へ織込んで表現したものである。故に高度の累加的記號である。行くもまた累加的である。なぜならそれは移動の觀念と共に肯定的確言を表現するからである。肯定的であることは、他の一形「行かない」と對照させてみれば歴然である。それでは行くなる語に於ては、移動の觀念と肯定的確言の觀念とは、紙を二枚合せたやうに累加されてゐるので

あらうか。それとも毛拔合せのやうに、重なることなく連結されてゐるのであらうか。

いく　いかない　いけ　いこう　いき

といふ風に色々の條件を示す形を比較してみるならば、第一音節に於て移動の觀念が表はされ、第二音節以下に於て判斷の質や話手の意欲等が表はされてゐることを知るであらう。いま假に「いく」の「い」で示されるやうな觀念を第一意義と稱へ、「く」で示されるやうな觀念を第二意義と稱へて話を進めよう。

さて、接近的移動の觀念を示す他の言葉を持つて來てみよう。そして同樣の順序にそれの諸形を置いてみよう。

くる　こない　こい　こよう　き

この語では、移動の觀念を示すべき音節は三樣の母音性を呈してゐる。それゆゑ音相の統一性は必ずしもこの語の第一意義の表現にとつて必須でないことは明かである。第二意義の表現に當つてはどうであるか。

いけ――こい

から對照させてみれば、やはりこゝでもそれが必須でないことが分明する。

こゝに於て我々は方法論上の重要な一つの消極的原理を得る――

音相の同一性は文法範疇定立の規準とはならない。

現代日本語の口語に於ける動詞終止形は事實上悉くウ音に終尾してゐる。けれどもウ音に終るものは終止形であると定義することは出來ない。こゝではそれは共時論的偶然の一致であつて、一般性を有つた定義の仕方ではない。例へば命令形を定義するに當つて同じ筆法をとつたならばどうであらう。エ音に終るものは悉く命令形であらうか。來

いは如何に、見ろは如何に。原理の積極的言表は後にゆづる。こゝでは範疇そのものについてもう少し考察を進めてみたい。

行くも來るも見るもその第一意義を別にしてゐるけれども、第二意義を等しくしてゐる。いづれも肯定的確言を示してゐる。このやうな辭の示す意義内容の統一性を文法範疇といふ。

第一意義に關してはどうであらうか。行くも來るも見るもその第二意義の一を等しくしてゐると同時に、別種の第二意義を等しく表現する可能性を有つてゐるといふ點に於て、三語とも同一範疇に屬すると看做すことが出來る。即ち

行く――いかない　いけ　いこう　いき
來る――こない　こい　こよう　き
見る――みない　みろ　みよう　み

この三つの語はいづれも動作又は行爲を示すが故ではなくて、第二意義の表現形態を等しくするが故に同一範疇に屬するものと考へられる。しかしながらこのやうな發見手順を經て見出された一個の範疇に收まる一切の語は、意義上何らの統一をも示さぬものであらうか。これは理論問題ではなくて事實問題である。形態論上同一性質を有つ語を悉く集めてみて然る後に答へることの出來る問題である。經驗はこの形態論的に見出された範疇が同時に意義的範疇を形成することを教へる。このことはまたアプリオリに想像することが出來るのである。話手が直接知覺するものは話手の言に於ける音相を通じての形態のみである。若し形態の同一性が意義の統一性を引出すよすがとならなかつたな

らば、凡そ理解なるものは成立しないであらう(私のいはゆる「對應の假說」、參照一般文法の原理二四五節)。文法範疇が社會的論理であり、オルガノンのオルガノンでなければならぬ理由はこゝにある。

文法學は定義上言の抽象的樣相を求める學である。行くと來ると見るとに於ける個別的意義は始めから考慮圏外に置かれる。しかしながら抽象的意義を發見することは正に文法學者の任務である。抽象的意義は發見の目的物であつて、何ものに對してもその前提であつてはならない。イェスペルセンは文法學に形態論、統辭論の二部門を分ち、前者は「外部形態」即ち我々の音相から發して「內部意義」即ち我々の抽象的意義に達せんとし、後者はその逆の行き方をするものであるとなした(文法の哲學三九以下)。氏は統辭論にあつては意義は豫め與へられてゐるといふ。我々に從へば、文法學に於ては意義はアキレスの踵である。把へたときにはもう文法學的運動は停止したものといはなければならない。意義が與へられてゐるのは、作文に役立つ教科文典に於てのみである。學の本質は識にはなくて、知にある(參照速水敬二「問と答」、思想一四〇號二九頁以下)。識は知に達する潛り戸に過ぎないのである。

道具を道具として研究する。これほど無意味な仕事はない。文法範疇が何の道具であるかを知ることこそ學の名に値するのである。

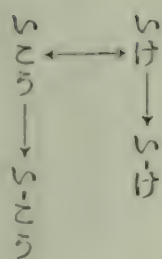
私は先に一對の假の名稱を拵へた。第一意義及び第二意義がそれである。私はいまそれらを慣用に從つてそれぞれ意義部及び形態部と改名したい。稱呼の是認はあとから與へるとして、それより先に意義部及び形態部なるものゝ本質を考察してみよう。

「いけ」といふ一つの言葉は、遠退的移動の觀念と共に話手から聽手へ向つての命令の觀念を表はしてゐる。なぜそ

れが分るかといへば――一つの答へ方をしてみよう――いけと貴方に言はれて私が遠退的行動をとらなかつたときには、貴方は身振や表情によつて私にその行動をとらしめたであらう。それでも私がぽかんとしてゐたならば貴方は私の身體に觸れてまでその行動をとらしめたであらう。頗る原始的な話であるが、貴方のさうした音聲又は表情又は身振などの心的映像と私がなす遠退行動の觀念との間に聯合が成立する。その場合いけといふ音聲連鎖は私にとつては單純なる記號として知覺され、連鎖のどの部分に移動の觀念が代表されてをりどの部分に命令の觀念が代表されてをるかは全然わからないにせよ、私にとつては、又は貴方にとつては、私がたゞ貴方の言に應じて遠退行動を開始すればそれで用は濟むといふ體驗を得る。同樣にして貴方が私を誘ふ際に「いこう」と叫び、それを聞いて私が貴方と共に何處ぞへ移動したならば、いこうといふ音聲映像と私が貴方と共に移動するといふ行爲の觀念との間に聯合が成立する。私は第二の體驗を得る。この二つの聯合が度重つて行はれるときには、貴方の言に應じて私が單獨で移動することゝ、貴方の言に從つて私が貴方と共に移動することゝの間に、共通的なものがあることが自發的に意識される。それと同時に二つの分節音「いけ」と「いこう」とが互に近寄せられて

いけ――→い-け
↕
いこう――→い-こう

の如き分析が行はれ、次の瞬間に

い-け
い-こう　　い-　け
　　　　　　　こう

の如く、第一音節が同一化される。バイイのいはゆる限定と同一化（フランス文體論一九節）とが、同時的に行はれる。「い」はこゝに於て個別的な記號ではなくて範疇的記號と化した。語ではなくて辭となつた。いけをい-けと分析することを可能ならしめるものは、いこうの共時的存在である。いけのいはそれ自身によつて辭ではなく、他によつてそれ自身の辭の性格を得る。こゝに文法がある。一辭を辭たらしめるものは他の一切の辭である。いけのけについても同樣にして説明を與へることが出來る。

さて、いけといふ音聲に應じてなした行動といこうといふ音聲に應じてなした行動との相違は、移動そのものに關しては同じであつたが、移動の主體が一にあつては聽手だけであり、他にあつては話手と聽手との雙方であつたといふ體驗事實にある以上、この區別がいけのけといこうのこうとに配分されるのは當然である。そこでいは行動そのものを指し、け又はこうは行動の主體及び樣態を指すといふ併し漠然たる意識が生ずる。

いま一般に記號が現示されて實踐界に於て何らかの效力を發する瞬間にその記號は意味を有つと私は定義する。私は外國人たる貴方に向つてこの馬鹿野郎と怒號する。貴方はむろん私の言ふことは分らないから、私の言は貴方にとつては唐人の寢言である。そのとき貴方は私の言葉を意味がないといふ。猫に小判、豚に眞珠は意味がない。效力がないからである。人間にとつては小判はむろん貴重である。それには交換價値がある。交換價値とは一物を與へてそれと交代に獲る他物が主體の用に直接立つ性能である。だから價値なる概念はもと〳〵主觀的概念である。これに反

して意味なる概念は客觀的概念である。小判を猫に與へても猫は有難うとも言はなければ何らの行動をも開始しないからである。意味の世界は行動の世界でなければならない。私が刺戟を與へ貴方がそれに反應する實踐的世界でなければならない（參照ブルームフィールド－言語二七、一三九以下）。故に意味は、私が貴方を私の意欲の對象と看做す生活的領域に於てのみ存在する。我々の術語でいへば、意味は言に屬するのである。

　意味が言に屬するものであるならば、當然それの陰在的樣相の存在が考へられる。卽ち言語へと改注又は還元されたる意味なるものがあらうか。いけといふ言葉は私がいけと叫んで貴方が行く行動を開始しないうちは意味がない。けれどもいけといふ言葉は又、その言葉を叫んだならば貴方が行く行動を開始すべき力を具へてゐる。この陰在的なる意味を稱して私は意義といふ。故に意義は言語界のものである。

　さて又、「いけ」といふ言葉に於て、その前半と後半とでは、いづれが現示力をより多く有つてゐるであらうか。言ふ迄もなく後半である。いま貴方が聾啞であると假定する。貴方の眼の前に私はお菓子を差出して、御自由に召上つて下さいといふ意を貴方に傳へたい。私はそこで自分の前にある菓子を一つ手に摘んで自ら食べる眞似をする。しかし私はそのとき下を向いて貴方とは無關係にさうした眞似をしはしない。私は貴方の眼を見ながら、恐らくは微笑を浮べながら、さうするであらう。この場合、食べる眞似は判斷論的にいへば理に當る。私が貴方へ向ける眼差と微笑とは論に當る。理は可能態であり論は現示者であつた。同樣にして、いけのいは理でありけは論である。理は論の內容をなしてをり、論は理の形式をなしてゐる。そこで意義の中核といふわけで我々はいけのいの如き辭項を意義部と名付け、いけのけの如き辭項を形態部と名付けるのである。辭項は互に他に依存するが故に、全體なる概念の對語な

る部分を示す部といふ字を用ひるのである。或る人は意義素、形態素といふ。しかし我々の考へるところのものは素ではないのである。素は原則としていくつあつても構はない。けれども部は二つしかあり得ない。なほ又、或る人はphonème を音素と譯し、歐語に於て私のいふ意義部と形態部がそれぐ\ sémantème, morphème といはれるのと並行せしめて、譯語の合理性を追認しようとする。譯語は須く原語の示す概念の本質を摑んだ上で作製されなければならない。三語の共通接尾 -ème はむしろ偶然的なものである。セマンテームとモルフェームとが同一人によつて作られたに對して、フォネームは他の學者によつてそれ以前から使はれてゐたことを別とするも、なほ後者が殆ど常にさういはれるに對して前二者は色々と改稱されてゐるといふ事實は、三語を同列に置くことの不當を雄辯に語るものでなくてはならぬ。

それはさて措き、先刻私はいけを分析して前半に意義部を認め後半に形態部を認めた。兩部の現はれ方は累加的でなくて連續的であつた。しかしながらそれは言語活動にとつての必然ではないのである。ロシヤ語では叙述文と疑問文との相違を音の高低によつて組織的に示すことが出來る。彼が在宅することを表はすときの on dóma では賓辭の揚音部を他より凡そテルツほど高めて發音し（dǒma）、彼の在宅の如何を問ふときには同じ場所をキントほど高めて發音する（dǒma）。疑問の助詞 li を介するときは、累加的記號は解かれる——dóma li on?（英語のやうに——is he at home?——文尾を揚げない）。これは叙述と疑問との相違であるから、音調別によつて示されることはむしろ月並な現象とも思はれようが、言語によつては肯定否定の區別をさへ音調によつて立てゝゐるものもあるのである。アフリカのプール語では、mi warata といふ一文を最後の母音を他と同じ高さにして發するときは、「俺はお前を殺

すぞ」の意味となり、件の母音をぐつと高めて發するときは、「俺はお前を殺しはせぬ」の意味となる、といふやうなことが報告されてゐる（参照ヴンドリエス「言語」九一）。

更に重要なことは、形態部は資料的なる何ものをも介さずして現はれ得るといふことである。ソッスュールのいはゆるゼロ記號がそれである。資料的ゼロが形態部となり得るのは、自發的聯合の原理並びに對立の法則に基くからである（参照小林「一般文法の原理」一九二節）。ロシヤ語では硬音終尾の女性實詞の複數屬格は語尾らしいものを有つてゐない。例へば「頭」を意味する單數名格 golová は複數屬格では golóv となる。これは語尾がないのではなくて、ゼロ語尾があるのである。語尾の幻があるのである。同樣にして、「眠る」を意味する不完成態動詞 spat' にも我々は語根母音ゼロを認識する、即ち (s+0+p)+a+t'（順次に語根、接尾辭、語尾）。なぜなら始動態 zasnut'（＜*za-sp-nu-t'）に對する始動不完成態 zasypat'（＜*za-syp-a-t'）では立派に語根母音が現はれてをり、しかもこのやうな現象はロシヤ語では頻繁に行はれてをるからである。因みに實詞「睡眠」は son といふが、この語は本來 *sopn であり、古代スラヴ語では sŭnŭ であつた。そしてラテン語の somnus（＜*sopnus）やギリシヤ語の húpnos（＜*supnos）と共に印歐原語 *sup-no-s に溯る。但しかの s-n は現代のロシヤ人自身によつて spat' 及びその一族と自發的に聯合せしめられない限り、共時論的語群に歸屬するものではない。印歐語では母音制に於てゼロ母音が組織的に採用されてゐる。即ち

e　　o　　ゼロ　　（メイエ「印歐語比較研究序說」一二三以下）

これをドイツの學者たちは

充段　　高段　　去段

といふ風に名付けてゐるが（參照ヒルト－ギリシヤ語音韻論及び形態論提要九六）、この命名法には通時論的臭味がある。

例、ギリシヤ語

e-gen-ó-mēn　（アオリスト）

gé-gon-a　（完了）

gí-gn-o-mai　（現在）

の三段は「成る」を意味する動詞の活用形である

語は原則として意義部と形態部とから成る（參照ドラクロアー言語活動と思惟二一一以下）。語は形態部の力で現示されるのである。だからして形態部の本質は繋辭的であるといふことが出來る。形態部はついてである。意義部はついての實體である。ついては實體を豫想せずしては存在し得ないが、逆に實體はついてなくしては單なる直觀に止まつて、傳達の仕樣がない。ついてを抽象し去つた實體は文法學の對象とはならない。實體を本原的に豫想せるついてを考察するものが文法學である。關係學とか形態學とかいはれる所以である。語といはれるものは、現示されることを豫想することなく單に意義の擔手と考へられた場合には、私はそれをそのまゝ語と呼ぶことにする。これに對して、現示的要素を身に附けたものと考へられた場合には、それを特に詞と呼びたい。さう定義するならば、詞は關係概念であるからして、一の種類の詞を定義するには他の種類の詞を同時に定義しなければならない。それは「親」が「子」に規定され、「子」が「親」に規定されると一般である。

一、詞の定義は他のすべての詞の定義と相關的にのみなされ得る。

そして又、

一、詞の性格を形成するものは、それと他詞との關聯的構造である。

以上二つの命題は文法學的操作を指導すべき最高原理である。この原理の重要性を深く意識し且つ實地に適用してゐる學者を、私はわが山田孝雄博士に見出す。博士は六種の助詞のうちで混同され易い格助詞、副助詞、係助詞の三種を識別するに當つて、右の方法をとつてをられる(日本文法要論四三以下)。これは文法學的作業の模範となすに値するものと思はれるからして、少々長くはあるがこゝに引用することを許されたい。

A　格助詞の性格——

一、格助詞は決して相互に重ね用ひられることがない。

二、格助詞は副助詞と重ね用ひられることがある。このときには副助詞は格助詞の下にあるのが通例であるが、時として、格助詞の上に行くこともある。(參照Bの二)

三、格助詞と係助詞とは重ね用ひられることがある。このときには係助詞は必ず格助詞の下にあるべきもので、決して上に行くことはない。(參照Cの二)

B　副助詞の性格——

一、副助詞は時として相互に重ね用ひられることがある。そのときには上下いろ〱になる。

二、副助詞は格助詞と重ね用ひられることがある。(參照Aの二)

三、副助詞は係助詞と重れ用ひられることがある。この場合には副助詞は係助詞の上にのみあつて、決して係助詞の下には行かない。（參照Cの三）

C　係助詞の性格——

一、係助詞は時として相互に重れ用ひられることがある。この場合には「にも」「もぞ」「もこそ」「もや」等々の用例があるが、必ずしも自由自在ではなくして一定の慣例あるものに限られてゐるらしい。

二、係助詞は格助詞と重れ用ひられることがある。（參照Aの三）

三、係助詞は副助詞と重れ用ひられることがある。（參照Bの三）

この外になほ係助詞には次の制約がある。

四、係助詞は接續助詞「ば」の下について、その上の句とその下の句との陳述の關係を嚴密に結合する用をなす。この第四項の特性は格助詞と副助詞とには決してないことである。

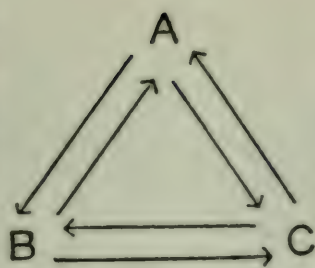
これらの事項によつて、この三者は嚴然たる區別があることが外形的にも認められる。また內面的には、

一、格助詞と副助詞とは句の組成分子につくことは共通するが、格助詞は一定の關係を示して、他に融通が利かず、副助詞はすべての組成分子に共通してつく。

二、副助詞と係助詞とはすべての格に通じ又下に來る用言に關係を有つ點に於て共通するところがあるやうに思はれる。しかしながら、副助詞は下の用言の意義卽ち屬性に關係を有つものであり、係助詞は下の用言の陳述の力に關係を有つものであるからして對象が違ふものである。

三者の關係を圖示すれば

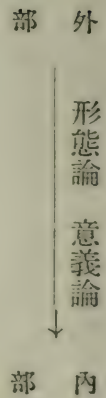
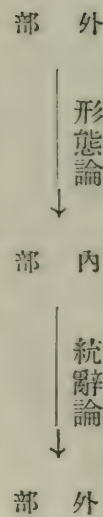
格に關して ＼ 用言に關して	用言の意義に關す	用言の陳述に關す
一定の格を示す	格助詞	
すべての格に通ず	副助詞	係助詞

以上が博士の所説の大要である。

箇條書が示す通り、各詞は他詞との關係によつて自己を規定してゐる。從つて各項は相互に他を參照しなければならない。各詞の相關關係の本原的圖式を書いてみれば、上の如くなる。矢は一個の特性を示す。認識された限りの數の特性から成る想像的圖形がいはゆる構造である。人物又は事物の性格とは要するにこの構造を指すものである。構造がそれを有つ主體の組織的骨骼と考へられた場合に、性格といはれる。詞の性格はこれを內面的に見れば關聯的構造である。そして文法とは、逆に、詞の構造的關聯であると見ることが出來よう。この故に文法は一國語の性格的表示であり得るのである。勿論文法ばかりが一國語の性格をなすものと、逆にいふことは許されないが。

A

B　C

以上のやうな手續を經て或る文法範疇の形式が定立されたとする。文法學の仕事はそれで完了したのであらうか。文法範疇が意義を含むものであることは前に說明した通りである。その意義の內包と外延を決定することが文法範疇論に於ける最後の目的でなければならない。「形態論」は「意義論」を目差してゐるのである。それゆゑ兩者は一線上に

あつて同じ方向を指してゐる。

イェスペルセンの考へは正にこの逆であつた。

我々に從へば、「形態論」は獨立の一部門を文法學の内部に於て立てる資格を有たぬものである。それは「意義論」への手續に過ぎないからである。文法學はその手續に於ては悉く形態論である。その目的に於ては悉く意義論である。

例へばこゝにドイツ語で屬格なる範疇があるとする。カントの第一批判書の表題なる Kritik der reinen Vernunft に於ける屬格は如何なる意味を有つものであらうか。純粹理性が何ものかを批判するのであるか。何ものかゞ純粹理性を批判するのであるか。主體的屬格であるか、對象的屬格であるか。事實、カント自身に於て意味の動搖が認められるといふ（ファイヒンゲル）（大西克禮－カント「判斷力批判」の研究 一〇）。冠詞 die の屬格形 der の只單なる形態は、それの機能卽ち關聯を調査することによつて決定される。しかしそれだけでは der は何ものをも意味しない。der はそれが顯はれた一切の用例に於て何を意味してゐるかを内包的にも外延的にも調べ上げなければならない。カントが相反する兩義に der を使つてゐるといふ事實は、ドイツ語の屬格の性質を知る上に大切な事例である。文法的事實は經驗的事實である。それ故に千回の用例を以て千一回目の用例の意味を憶測するわけにはいかないのであ

る。シュハルト(Hugo Schuchardt)の「文法は一つしかない。これ即ち意義論である。いな嚴密にいへば記號學である。……辭書は文法よりほか何らの資料をも呈示するものではない。辭書は文法に對して字母順の索引を供する。」(語錄一三五)との警句的文句は、一切の語彙が文法を擔つてゐることを述べたものと見るべきであらう。イ・スペルセンはシュハルトの眞意が呑込めぬと言つてゐるが(文法の哲學三二註、參照小林・一般文法成立の可能性について四一註)、我々はブレンダル(Viggo Brøndal)と共に(イェスペルセン論叢二九七註)、文法と語彙とは別界に屬しながら背中合せであると考へるものである。

翻つて思ふに、der の機能論的調査そのものからして、他語との意義關聯が豫め與へられてゐなくては行ひ得るものではない。意義關聯即ち文脈が、全體が、一語の形態を規定してゐるのである(このことに關しては時枝誠記氏の論文古語解釋の方法、國語・國文一九三三年九月號を參照されゝば獲る所多いと思ふ)。このことは一見我々の立てた原理と矛盾するかに思はれる。意義が豫め與へられてゐるといふのであるから。言葉を省いて私の考へるところを直ちに圖示してみれば、

意義 ⇄ 形態

といふやうな具合になる。即ち意義が豫め知られて始めて形態が判然する。形態が判然して始めて意義が透明になる。循環運動ではないか。これは單なる文法學上の問題ではなくして、哲學の問題である。文法學の第一前提はこの問題に連つてゐるのである。私の未熟な考へを以てすれば、この謎は次のやうにして解くよりほかに道はない。

言語的意義は、その論理的起原でもあり發生的起原でもあるところの言的意味へと還元されなければ、最後的な說

明は獲られるものではない。私が貴方を理解するのは貴方の話によるのではなくして、貴方の言語活動、貴方と私との立場によるのである。私は既に貴方を無言の言によつて理解してゐる。言の分析・再構といふやうな迂遠なことは二の次である。神秘的な言ひ方ではあるが、私は貴方を本能的に理解する。こゝに於て我々は、私と貴方とが、理性に於てと同様に、生命に於てもアプリオリに連がれてゐることを信ぜざるを得ない。

文法は非文法的なるものから二次的に派生したものであらう。文法があつて言語活動があるのではなく、言語活動があつて文法があるのである。文法未成の言語活動が兒童の世界に存在し得るわけである。

私は本講の書出で、貴方を私の意欲の對象とした。その意欲は實は利己ではないのである。私が貴方と先天的に結ばれてゐるのを信ずることが私の幸福である。

人名索引

＊を附せるものは文献表に載せず

引用文獻

Bally : Traité de stylistique française. vol. 1.[2] Heidelberg 1921. フランス文體論.

〃 : Le langage et la vie.[2] Paris 1926. 小林英夫譯 : 生活表現の言語學. 東京・岡書院 1929.

〃 : Linguistique générale et linguistique française. Paris 1932. 一般言語學とフランス言語學.

Bloomfield : Language. New York 1933. 言語.

Brøndal : Le système de la grammaire. (Grammatical miscellany offered to Otto Jespersen. Copenhagen-London 1930) 文法學の體系(イェスペルセン論叢).

Croce : Logik als Wissenschaft vom reinen Begriff. Nach 4ter Auflage übersetzt von Felix Noeggerath. Tübingen 1930. 純粹概念の學としての論理學.

Delacroix : Le langage et la pensée.[2] Paris 1930. 言語活動と思惟.

Dittrich : Grundzüge der Sprachpsychologie. Bd. 1. Halle 1901. 言語心理學大綱.

Frei : La grammaire des fautes. Paris 1929. 誤用の文法.

Gardiner : The theory of speech and language. Oxford 1932. 言と言語の學理.

Hašimoto 橋本進吉: 國語學概論(上)(岩波講座日本文學) 1932.

Havers : Handbuch der erklärenden Syntax. Ein Versuch zur Erforschung der Bedingungen und Triebkräfte in Syntax und Stilistik. Heidelberg 1931. 說明的統辭論提要.

Hirt : Handbuch der griechischen Laut- und Formenlehre. Eine Einführung in das sprachwissenschaftliche Studium des griechischen.[2] Heidelberg 1912. ギリシャ語音韻論及び形態論提要.

Jespersen : Language, its nature, development and origin. London 1921. 市河三喜, 神保格共譯：言語, その本質・發達及び起原. 東京・岩波 1927.

〃 : The philosophy of grammar. London 1924. (reprinted 1929) 文法の哲學

Kalepky : Neuaufbau der Grammatik als Grundlegung zu einem wissenschaftlichen System der Sprachbeschreibung. Leipzig 1928. 文法學の新建築.

Kindaichi 金田一京助：國語音韻論（言語誌叢刊）東京・刀江書院 1932.

Kobayashi 小林英夫：一般文法成立の可能性について・その序說.（京城大學法文學會編「言語・文學論纂」）東京・刀江書院 1932.

〃 : 批判的解說・一般文法の原理. 東京・岩波 1932.

Martel : Michel Lomonosov et la langue littéraire russe. (Bibliothèque de l'Institut français de Leningrad. tome XII) Paris 1933. ミシェル・ロモノーソフとロシヤ文學語.

Meillet : Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes.[6] Paris 1924. 印歐語比較研究序說.

〃 : Linguistique historique et linguistique générale.[2] Paris 1926. 史的言語學と一般言語學.

Ries : Was ist ein Satz? (Beiträge zur Grundlegung der Syntax, Heft III) Prag 1931. 文とは何か.

Saussure : Cours de linguistique générale.[2] Paris 1922. 小林英夫譯 : 言語學原論. 東京・岡書院 1928.

Schuchardt : Schuchardt-Brevier. Ein Vademecum der allgemeinen Sprachwissenschaft. Zusammengestellt und eingeleitet von Leo Spitzer.[2] Halle 1928. シュッハルト語錄.

Sechehaye : Programme et méthodes de la linguistique théorique. Paris 1908. 理論言語學の綱目と方法.

〃 : Les deux types de la phrase. (Mélanges d'histoire littéraire et de philologie offerts à M. Bernard Bouvier) Genève 1920. 文の二型 (ブーヰエ論叢)

〃 : Essai sur la structure logique de la phrase. (Collection Linguistique, XX) Paris 1926. 文の論理的構造.

Smith : Words as separate entities in ancient and modern languages. *Transactions of the Philological Society, 1931—32*. London 1933. pp. 19—38. 古代語並びに近代語に於ける分離體としての語 (語學協會會報).

Tokieda 時枝誠記 : 古語解釋の方法. さえはヲ中心トシテ. 國語・國文 1933九月.

Vendryes : Le langage. Introduction linguistique à l'histoire.[2] Paris 1921. 言語.

Vossler : Gesammelte Aufsätze zur Sprachphilosophie. München 1923. 言語哲學論文集.

Weisgerber : Muttersprache und Geistesbildung. Göttingen 1929. 母語と精神の陶冶.

Wundt : Die Sprache. 2ter Teil.[4] Stuttgart 1922. 言語.

Yamada 山田孝雄 : 日本文法要論. (岩波講座日本文學) 1931.

筋

昭和九年四月十日印刷
昭和九年四月十五日發行

國語科學講座
（第八回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院